
薔薇と桜と王子さま

春の七菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇と桜と王子さま

【Zコード】

Z8541T

【作者名】

春の七菜

【あらすじ】

桜です。一年前のあの日、遅刻しそうになつて、学校へ行く途中に初めて近道をしようとしたの。塀に登るための足台として井戸に足をかけたら、あれま、つるつと滑つて真っ逆さま…そうして気がついたら、なんとそこは異世界でした。

異世界に落つこちちやつたことだけでも大事なのに、馬に蹴られたり怪我したり問答無用で連れさらわれたり、もう大変！そんな桜のドタバタな日常を皆さんにお送りします！

01 ブルル村、そこが私の今の居場所。

「こかーじん、オレンジ……ううん、やつぱりんじよね」 果物がきたから探つてきてほしい、とマーサに頼まれたのは一時 間ほど前のこと。

ジエルニー 国外にあるブルル村、そこが今私の居場所。 一年前のあの日、私は学校へ行く途中にある堀を乗り越えて近道を しようとした。

その時に足台にした井戸の縁に生えていた草に足を滑らせ、そのまま 井戸に真っ逆さま！

大げがしちゃうのかな、ううん、それ以上に大変なことになっちゃうのかな、なんて冷静に思つていただけ。

気がつくと私は、この村でお世話になつているマーサの家で横になり、介抱されていた。

まあ、結局けがとかはなかつたんだけどね。

今はマーサとその旦那さんの営む小さな宿屋に住み込みで働かせてもらつている。

二人とも、私の事情（だつて服だつて顔立ちだつてこの村の人とは違つた）は詳しく聞かずに、優しく接してくれる。まるで本当の子どもに対するように、時に優しく、時に厳しく。私も、本当のお父さんとお母さんじゃないかと錯覚してしまうときがあるほど。まだ一年しか一緒にいないけれど、私は一人が大好きだ。

最初は異世界ということに驚き、不安定になり、大変だつたけれど、最近は少しずつこの世界に順応してきているように思う。それも、もちろん一人おかげ。

「りんごの木、発見しましたー！」

誰に言ひともなく、見せるともなく、敬礼！日本人つて意味なく敬礼しちゃう」と多こよね。

宿屋からしばらく歩くと、りんごの木がある。この世界は不思議で、冬以外であればこつでも果実をもぐことができる。まあ、少ないとが多いとかの違にはあるんだけれど。

「なつてるなつてる」

あちらじもひひひも、たくさんのりんご。ついこなまつしかやう。おつといけない、よだれが出やう。

なんで嬉しいかつて？だって、たくせーんあれば、たくさんのりんごパイができるがって、お密さんに振る舞つても余るじやない。マーサは私がりんごパイ好きなの知つているから、余つた分ごつそりくれるのよ、いいでしょ？まあ、余りすきるくらいりんごを拾つてつちやつて「限度つてものがあるでしょ」と怒られちやつたことも何回かあるけど・・・。だって好きなんだから仕方ないよね。

りんごパイ、ただでさえ好きなのに、マーサのりんごパイつて蜂蜜の分量がちょうど良くて、ヒーツてもおいしいのよーほっぺたが落ちるぐらうーにー！

りんごパイを思い出してにやけながら、落ちているりんごを痛みがないか確認しながらかごに入れていく。本当は木になつていての木を探つた方がいいんだよね。だけどこの世界のりんごの木つて背が高いのよ！栗の木みたいに。仕方ないから最初のうちには木に登つてもいだいたんだけれど、たまたまマーサと一緒に来たときに木に登り始めた私を見て、マーサが口をあんぐり開けて何も言えないでい

たのを見てしまつてからは登るのを止めた。うん、何が言いたいかは分かつたし。女の子が木に登るなんて・・・なんて危ない、とか大体そんなところだろう。まあ、こちらの世界の女の子は木に登らないのかもしれないよね。・・・うん?日本も女の子は木に登らないんじやいかつて?いやいや、ジェンダーフリーの時代だもん、・・・意味が違うとか言わないで。現に私だって登れてるんだから、日本だって登れる人は登れるのよ。まあ、そういうことがあって、マーサを心配させたくもなかつたから、木に登るのは止めた。今は下に落ちたばかりだろうと思われるりんごばかりを拾つているのです。

食欲は何よりやる気につながる。いつもよりも俊敏な動きでぱっぱつぱつぱと次々拾つていつて、大きなりんごがもうあと一個か二個で満杯になりそう。そんな時だった。

地面がわずかに揺れ、馬の鳴き声とけたたましい蹄の音が聞こえたのは。

01 ブルル村、そこが私の今の居場所。（後書き）

初めまして、読んでくださってありがとうございます！

今回文章を書くのが初めてなので、ドキドキ・・・。

誤字脱字を見つけたらご報告くださいと助かります。

続きを少しづつあげていふので、どうぞ桜の日常をのぞきに来てください！

春の

02 皿の前に、また、躊躇つて1Jが落ちた。1Jも1Jなん。

田の邊にせ、蹠。・・・蹠———？

「」

本当にびっくりしたときには悲鳴は出ないらしい。息を吸い込んで終わり、だつた。

ち付けられて。

飛ばされて衝撃的すぎてしばらく呆けっとしていたんだけど、ハツ

我慢我慢、
どこか痛めたみたいで痛い……」「と

何とか起き上がりつて周りを見渡すと、蹄の持ち主である馬はいなかつた。どこかへ走り去つてしまつたんだろうか。ああ、これつて現代で言うひき逃げか!? 異世界でひき逃げつて・・・。何となくがっかり来てしまう。

ふと。

視界の端で動くものがある。もしや馬に乗っていた人物か！？そう思い、首を動かして、それをしつかりと視界に入れる。と。

「あ・・・あなた」

わあ、可愛い声！それに、その声に見合つ可愛い顔と可愛い服。うわあ、可愛いだらけだ。日本に行けばアイドルも夢じやないよ！それくらい美少女だった。

私と同じ黒髪の、小柄の女の子。守つてあげたくなるような雰囲気をびんびん醸し出している。こんな女の子が、さっきの暴れ馬を？信じられないけど、状況からそつとしか思えない。

着ていい服からすると、きっと良いところのお嬢さんって感じ。だつて、マーサが貸してくれているこの服や、村の女の子たちの服と比べて、一目で素材や造りが違うことが分かる。

彼女は目を見開いて驚愕していた。・・・あれ、私変なところないよね？もしや大きな怪我で血が・・・出ているわけでもない。何だろう、と思しながらも、声をかけてみた。

「馬・・・から落ちたの、よね？大丈夫？」

「え、あ・・・ええ、大丈夫。心配してくださつてありがとうございます、あなたは・・・」

「私？大丈夫大丈夫、この通り元気だから心配しないで」

にっこり笑つてみる。でも実は、かなり痛い。腕が。でも、ここで痛いとかそういうことを言つちやうと、ややこしいことになりそうで・・・。異世界人の私は、我慢できることは我慢して、もめ事はできる限り起っこさず地味に生きるのが良いと、この一年で判断したのよ。

それでも心配そうな女の子に、もう一度にっこり笑つてみせる。大丈夫よ、と念押しするように。

そうすると納得したのか、たたたと私に走り寄つてくる。うわ、落としたんじやなかつたの、この子。確かに本人の言つたとおりピンцинしてるわ、なんて感心してしまつた。いや、確かに大丈夫つて言つてたけどさ、馬から落ちたんならどこか打つたんじやないのかな、とか思ったんだもん。でも、本当に至つて無事みたい。まあ、怪我がないのなら超したことはないよね。

なあんて思つて油断していたのが悪かった。次の瞬間、ガバ！と肩をつかまれた！痛い痛い痛いから！けど顔には出さないよつにがんばる、けど痛いんだよ！言わないけど！

「な、なに・・・」

「お願いがあるの、あなたに！」

「へ？」

「お、お願い？」

「私の身代わりになつて！」

身代わり。身代わり？身代わりつて。

事態が飲み込めない私に、焦つたように矢継ぎ早に話し始める女の子。名前をジュリエッタと名乗った。

「わたくし、父上や母上に反対したのだけれど、どうしても変えられなくつて。だから無断で出てきたの。これで少しは私の気持ちが分かってくれればいいのだけれど。でもきっと、そうはいかないのよね・・・。それでね、きっと脱走したことが今頃気づかれて連れ戻そうと兵が向かっているに違いないのよ。だから、ね、本当に申し訳ないと思うのだけれど・・・でも、こればかりは黒髪のあなたにしか頼めないの！お願い！」

「え、あの・・・」

「ありがとうー！」

いやいやいや、まだ返事も何もしてないんですけど。

私の心の中の突っ込みもちろん届かず、呆然としている私に自分のマントをかけて立ち上がる美少女ジュリエッタ。お礼にこれを、

だつて。

おお、マントのくせことてもさうひじしている。どんな素材かは分からぬけれど、きっと高級なものだ。・・・そうではなくて！

「ジユリエッタ、全く理解ができてな・・・」

「大丈夫、兄上たちに言えば、きっと何とかしてくださるわ！」

「いや、だから」

話を聞け！と言つ前に、お願ひねー！とそれはもうさわやかに手を振りながら走つていぐジユリエッタ。木の陰で馬にまたがる。馬、戻つてきていたのか、お利口さんだなあ。なんてどこかで思つ。足が痛んで走ることができない私は、立ち上がることもできず、馬とジユリエッタをその場で呆然と見送つた。

「・・・結局、何だつたの」

嵐が去つた、と思つた。とりあえず、ひき逃げではなかつたけれど。何者か分からぬし。身代わりつて言われても何のことか分からないし。黒髪のあなたにしか、つて言つてたけど、他の黒髪の人でいいと思う。何で私？・・・何となくやつかいことに引きずり込まれてしまつた気がしないでもない。

いやいやいや、やつかいごとに私は首を突つ込みたくない性分だから、昔から。静かに、穏やかな生活を望む私に、やつかいごとにんて言葉は要らない。頭をぶんぶん振つて、さつきの考えを吹き飛ばす。

「・・・ああ、りんご、拾うんだつた」

実際に馬に轢かれて彼女にまくし立てられたのはそんなに時間が経

つていなければ、あまり遅くなつてはマーサが心配する。いや、この怪我を見れば十分心配するだらうけれど。なんて言おつかなあ。正直に、馬に轢かれましたって言つたら卒倒するかもしれない。どうしようかなあ。

転がっていたかごを、落ちていた木の枝で引き寄せた。はあ。かごを抱えてため息。

ため息をつくだけ幸せが逃げるーなんて言ひけれど、今ため息をつかずに何をつくんだ。

「りんご」・・・は、お齧さんの分だけにしよう

こんなことになつた今、りんごパイが食べたーいとりんごをたくさん集める気力はもう残つていない。

仕方なく手の届く範囲に転がっていたりんごを四つから入れたところで、また蹄の音が聞こえた。

・・・正直、もう勘弁してもらいたいんですけれど。

03　ふるふるする腕。空気を読め！

また蹄。今度は有り難いこと、田の前まで来ず少し離れたところで止まつてくれた。

ほつとする。一日に一度も馬に轢かれるなんてことは丁重にお断り申し上げたい。

美少女ジユリエッタのお次は誰だ。

痛みと先程のショックで余裕のない私は、キッと馬上の人物を見上げた。

そこには。

「…………誰だおまえ」

「いや、あんたが誰だよ」

おおっと、私ったらー！口が滑っちゃった！
予想通り相手は形整つた眉をきゅっと寄せせる。

今度の相手は、金髪の美青年でした。

先程の美少女と同じく、はじめ私を見て田を見開いていたようだけれど、私の一言で不機嫌になつたようだ。私だつてあんたの一言で不機嫌になつたよ。なんてね。

でも、そんなに驚かれるつてことは、私やっぱりどこかおかしいのかな。異世界人つて分かる、とか？

見ていると、音も立てずに馬から降り、近くに寄つてくる。

さつきは少女だつたから特に警戒しなかつたけれど、今度は男性だ。
そう思い、少し体を固めて緊張する。・・・う、緊張したらまた痛くなつてきた、が、我慢我慢〜〜。

男性の手が伸びる。怖くなつて、ぎゅっと田をつぶつた。

「・・・おまえ」

「な、何ですか」

先程よりずいぶん近くの距離で聞こえたその声。綺麗なテノールボイスだ。思ったよりも透き通るその声に、顔を上げるとそこには、途中で手を止め、険しい顔をした美青年が。

「ジユリエッタはどこへ行つた。知つているのだろう」

ちょっと怖い。綺麗な顔立ちの人つて、ただでさえ怖く見えるのに、怖い顔したらさらに恐怖感募つちゃうじゃない、と思つていたら。がし！とまた肩をつかまれた。本日二回目。あーもうだから痛いんだってば！

「あの・・・」

「どこへ行つたのかと聞いている。これはジユリエッタのものどう。おまえが知らぬはずはない」

そう言つて私にかけられてくるマントをつかむ。

どうすればいいんだろう。彼女は、私が身代わり、と言つていた。でも彼女は誰に対して身代わりと見せかけたかったのか。・・・この人に、言つてしまつていいのだろうか。

『父上や母上に反対したのだけれど、どうしても変えられなくつて。だから無断で出てきたの』彼女の言葉を思い出す。・・・人に、ではなくて、その『変えられな』かつたことに対する、身代わり、なのかな。

「あ・・・あなたはジユリエッタとどういう関係が？」

「・・・おまえに何の関係がある」

「じゅ、ジュリエッタは私に、逃げる理由になつたことに対しても、身代わりをお願いして立ち去りました。私は了承していいけれど。だから、完全に無関係といつわけではないような・・・気が」

するんです、けど。青年の視線が鋭くて、つい言葉は尻すぼみになつてしまつたが、でも、言いたいことは分かるよね？ね？

そう問い合わせるように、青年の顔を見ていると、ため息をつかれた。いや、なんであんたがつくんだ。私だってずっと我慢してるんだぞ。

「俺は、ジュリエッタの異母兄、ジェニィルだ。ジュリエッタが婚約に頷かず、逃亡を図ったために連れ戻しに来た。おまえを身代わりに、と言つたのは、おそらく同じ黒髪のおまえを自分の身代わりとして婚約させろ、ということだらう。馬鹿馬鹿しいが」

「・・・・・」

異母兄、とか、婚約、とか、なんか聞き慣れない言葉があつたけれど。内容から考えるに、やっぱり良いところのお嬢さんつていうのはあながち間違つていなかつたようだ。というか、そんな大変なことをお願いしていつたのか、あのお嬢さんはー。

「驚かないんだな」

「は？ 何を？」

私の言葉に変な顔をする。何を驚けといふんだらう。まあ、確かに、婚約なんて言葉が出てきたことに対するちよつと次元が違うわ、つて思つたけど。でも、服や話しかから容易にそういう言葉が似合う（似合つといつのもちよつと変だけど）身分の人と想像できるもの。それより。

「私は了承してませんよ」

「……当たり前だ。妹だつて、本気ではなかつたのだろうが……まあ、少しでも足止めできれば、とか思つていたんじやないか」

それなら良かつた。ほつとする。事情も何も知らず、了承もしないのに、そんな大変な話を進められたらたまつたもんじやない。

「……馬に乗つて、あちらへ。行き先は分かりません」「やうか」

痛くない左腕を伸ばして、ジユリエッタの向かつた先を指差す。言葉も態度もつつけんどんで無愛想だけれど、この青年は嘘をついていないと思つたから。だからきっと、言つても大丈夫だと思った。
・・・あくまでも勘だけど。

ふと下を向いて、ああ、と気がついてジユリエッタがかけてくれたマントを差し出す。これは私には必要ない。

「彼女が貸してくれたものです。でも、私には必要ないから・・・ジユリエッタにお返ししてください」

そつ言つと、ひょいと青年は片眉をあげた。器用だなあ。私はできないわ。

「売ればそれなりにはなるが」
「必要あつません」
「まつ?」

どうでもいいけど、早く受け取つてほしい。左手がぴくぴくしてきただ。この男もそれに気がついているだろつ。

・・・急いで追いかけていたのではなかつたのか。じりじりんな悠長に話などしていいのか。

正直、穏やかな生活を望む私はやつかい」とになんて巻き込まれたくないので、早く受け取つてもらつてこの場を今すぐに行つたがつはいの青年に去つて欲しい。

「・・・行かないんですか
「部下が向かつている
「え」

いつの間に。

「気がつかなかつたのか。おまえの情報を聞いてすぐに指示を

全く気がつきませんでしたとむ。あなたの部下は忍者ですか。まあ、私はマントをはぐので一生懸命でしたからね。

・・・・・。

・・・だから。

「受け取つてください」「俺には必要ない」「だから、あなたではなく彼女に返してと」「あいつもいらんんじゃないのか」「そんなの本人に聞かなきや・・・」「おまえ、その怪我はどうした」「・・・え?」

話についていけない。おーい、今そんな話してた?

まあ、彼女はだましても、この青年には、怪我をしていないなんて言葉は通用しないように思う。だけど、できれば話を長引かせたくないんですよ、すぐにマントを受け取つていなくなつて欲しいんです、私はね。それくらい空氣読みなさいよ！

「…………とにかく、受け取つてください」

「俺の質問に答える」

「腕が限界なんですよ！」

「そんなことはいい。俺の質問に答えると言つている」

「そんなことはって……ええ、そうですとも転んで怪我しましたとも。でも、これはあなたには関係のない……つた！」

痛みが引かない右腕を捕まれた。見た目は軽く触つたよつて見えたけれど、これが激痛だった。何するんだ！

「かなり痛んでいるようだがな」

「だから、派手に転んだって……！」

ああ、話が進まないといつのは「こんなに腹が立つことなのか！

まあ、確かに怪我をしたのはあなたの妹さんが関係していますけれどね、きっとそれも分かつているような口ぶりですけれど、それならそれで、私は被害者なわけで、痛いところさらに痛くされてさらにはそんな怖い顔でにらまれなきやいけない立場なんかではないはずよ、絶対！

にらみつけようと顔をあげる。そこには、予想外に真剣な顔をした青年がいた。文句を言いかけた口も、自然と閉じる。

「服の裾や真中に蹄の跡がついているな。馬に踏まれた以外、どう言い訳する

「・・・・・」

改めてワンピースを見てみると、ああ、確かに。あちゅうあちゅう蹄
跡がついていました。

今度こそ、私の口からため息がこぼれた。

04 聞いちゃいねえ。会話が成り立ちません。

「ジュリエッタが馬を暴走させて激突、といったところか。申し訳なかつたな。妹に代わり謝るわ」

聞かなくとも分かつてゐんじゃないか。といつかそんな不遜な態度で言われても謝つてゐるようには全く聞こえません。と、言いたかつたけれど、言わなかつた。これ以上話をしてはいけない、関わつてはいけないと、どこかで警笛が鳴つてゐる。

「大丈夫です。命も無事ですし、怪我だつて安静にしておけば治りますから」

だから、どうぞ私のことなど捨て置いて妹さんのどこのに向かわれてください。

どうかどうか今すぐ！」。

そんな思いを込めて青年を見る。いや、見るだけだと変に誤解されても困ると途中で考え直し、声に出してお願いしてみた。が。

「やうか」

と言つたきり、思案顔になり黙つてしまつた。

分かつたのなら、どうか立ち去つてほしい。それと・・・できれば人の顔をじろじろ見ながら考え方をするのはやめてほしい。なんとなく。中身はあれだけど、外見はまあまあ格好良いんだから、ずっと見られるのはちょっと心臓に悪い。あくまでちょっとだけ、ね。

「おまえのその髪は」

「え、髪？」

「生来のものか」

「せいら・・・ああ、生まれつきの」とへんうですわざと・・・

「その言葉、真だな」

「つ、嘘なんかじや・・・」

怒っているのか真顔なのか知らないけど、目がギラギラしていて怖いんですけど。

でもって何で髪のことなんか聞くの？私の髪、なんか変？

そういうえば、ジュリエッタも黒髪のあなたにしか、って言っていたけれど、他の人でも良いのに私に頼むつてことは、このあたりじゃ珍しいのかなあ？

わけが分からず、青年を見つめていると、ふと手を引かれた。いやいやいやふとじやなかつた。思い切りだつた。それは、痛みのない手だつたけれども。

「こつ・・・痛い痛いいいた、いたたたたた！痛いから !

! - !

手を引かれて立ち上がりせられる。そして、踏み出した足がこれがまた痛かった。さらに今は、反動でちょっと揺れた右腕がめちゃくちゃ痛かった。

ああ、体のあちいらちらが痛くて涙が出たう。物心がついてから涙を流したことがないで、日本では乾物なんて言っていた私です。・

・ああ、でもやっぱり涙は出なかつたわ。

起こすにしてももうちょっと手加減つてものがあるでしょ、しかもレディに対してーそう思つてキツとにらみつける。これでも背の高い私は威圧感あるつて言われてたんだ、日本で。少しさづめ！

「おまえ、名は

うわあ、効いちゃいねえ。私より背が高かつた相手は全然気にしないようだ。

「名は」

「・・・・・」

「口が開かなくなつたか？なら剣で・・・」

「い、言えばいいんでしょ…さ、桜よ…」

なんて物騒な男なんだ！

「・・・ もくらよ？」

「さ・く・ら、です、桜つ！いい加減手を離してください…」

「桜、か。珍しい名だな。どこの生まれだ」

聞いちやいねえ。がつくり。

「答える」

「・・・・・」

強く言えば何でも答えると思つたら大間違いよーと思つたけれど。ああ、これがきっと権力を持つてゐるだらう人の言葉なんだと思つた。若いけれど、きっとこの青年は、貴族とか騎士とか、人の上に立つて指揮する、そういう立場にいる人だ。だつてこの青年の言葉には力がある。せつして、つい話してしまいそうになる。

けど。

マーサたちにだつて詳しく述べをしていない。それをこの青年に？

「異世界から来た」なんて言つて、マーサたちから離れなきゃいけないことになつちゃつたら？

適当に違つといふの名前を言つたつて、調べれば違つてことがすぐ分かる。ううと、それ以前にブルル村以外の町の名前なんて知らない。だからって下手にブルル村のことを持ち出せば、迷惑になるような気がする。

・・・話さないという選択肢は、きっとない。この青年がどうこう人かは分からないけど、見た目と態度が偉そうな人が、こんなどこにでもいるような一人の村民にしつこく聞いてくるのは、それはきっと何かあるはずなんだ。私がどこにでもいるような一人の村民には見えないとということだ。・・・私自身はそうは思わないけれど。でも、そつだとすれば、話さなかつたところで今後何かしらの問題が発生してくるはずだ、きっと。それは困る。特に、マーサや旦那さんに迷惑がかかることだけは、避けなくちゃいけない。

相手は私をにらみつけるように見たまま、私の言葉を待つている。一年、か。隠れるようにひっそりとした生活、それでも本当の家族ができたような、毎日が幸せな夢を見ているようなそんな日々だった。

異世界人の私が、じつやつて大変な思いもせず、のほほんと過ごしてきたのも、きっと奇跡だったのだろう。

「潮時、か」

手を離されないまま、私は空を仰いだ。ああ、良い天気。井戸に落ちたあの日も、こんな天気だった。
青年に向き直る。

覚悟を、決めた。

05 考え事はお口を閉じて。周囲確認せねばならぬ。

言い訳はできない、と思ひ。やつと嘘をつけたところで、この世界にいる訳ではないが鋭い青年は、「まかされないだろ?」から。

だから本当のことを話した。一年前のあの日のこと、学校に行く途中で井戸に落ちて、気がついたらこの世界にいたこと、自分は異世界から来たこと、この一年は近くの村の親切な人に養つてもらつていたこと……。

話し終わって、安堵か、諦めか、どちらか分からなければ、ため息が出た。

「……本当は、誰かにこの話を聞いてもらいたかったのかもしれない」と思つ。

ずっと聞いてほしくて、でも誰にも話せなくて。話したら迷惑になるかもしない。話したら変な目で見られて、もうこの穏やかな場所にはいられないかもしない。この幸せな場所を失いたくない。そう思つたら怖くて話せなかつた。

おわるおわる青年の顔を窺う。

「どう思つただろう?」か。変なことを言う女だと思つただろう? それとも、異世界だなんて気持ち悪いと思つただろう? そんな考えがよぎつたが、反して青年の表情は全く変わっていなかつた。

「……ああ、」

なにやらまた思案しているよう。何を考えているんだ? 表情からは何も読めなくて、落ち着かない。

私はこれからどうすればいいんだ? 「……どうなるんだ?」

見逃してもらえないかなあ。異世界人ということで話を聞かれたりとか、そういうのだけなら良いんだけど。とりあえず、生活が一変するとかのやつかいごとに巻き込むのだけは止めて欲しい。あの数時間前までの、穏やかな生活に戻りたいという希望は、最後まで捨てません・・・が、なんだかやつかいごと、思いつきり巻き込まれそうな気がするんだよね、さつきからひしひしと。・・・気のせいだよね!うん!

「それは、本当の話か?」

「こんな話即興できるほど私はメルヘンな思考の持ち主じゃないわ」

メルヘン?と首をかしげられたが、私もうまく説明できずに黙り込む。青年は、そんな私の様子に気分を害した様子もなく、口を開いた。

「おまえ、異世界より来たのであれば知らないだろうが、この国では、黒は高貴な色の一つとされている。そして、黒髪は王族よりしか生まれない」

「・・・?どうこいつ・・・」

「そういう理なんだよ、この国において。もちろん黒髪だからといって王位継承権に大きく関わるとかそういう話ではないが、とにかく王族以外に黒髪はいない。存在するはずがないんだ。王族でも、百年に一人、持つて生まれるかどうか、それ程に珍しい。これは遺伝することもない。神の気まぐれと、そう言われている。そして、現在において我が妹ジュリエッタが唯一、この国の黒髪の持ち主だ」

「・・・・・・」

「平民より生まれる」とはない。前例は一件もない。・・・だから、おまえが異世界から来たという話も、個人的にはとても信じられない話だが・・・ただ、その理からすれば、異世界人ということで黒

髪の説明はつく。全く信じられないわけじゃがないな」「

「はあ、それは」

良かつた、と言えばいいのか。不思議な話。そんなことがあるのね、としか言えない。私の中の常識を遥かに超える事象に、へえ、そうなんだーと事実として取り入れることしかできない。」の黒髪、そんなんに珍しいものなんだな。きっと、國の外れらしくかなりの田舎であるこの村だからこそ、私の髪の色をみんな気にする」ともなく、私も静かに過ごしていられたのだね。

どうか、だからあんなにジュリエッタもこのジュニィルといつ青年も驚いていたのか。

・・・・・ ん? ジュリエッタ?

黒髪が生まれるのは王族だけで、ジュリエッタが黒髪を持っている、つていうことは。

「お、おおおおおおお！ 王族！？ ジュリヒタつて王族！？」

つまりジュリエッタの兄って言ってたこの青年も、王族ってこと！？

驚いて青年を振り仰ぐと、なんだか呆れた目で「あなたを見つめていい。はいはい、たつた今気がつきましたとも、どうせ頭の回転が遅いですよーだ、悪いわ！」

こほん。ええと、王族つて、王族つてあれだよね、王様一家のことだよね、かなりというかこの国で一番偉いんだよね？

とすると……良いと」お嬢さんお坊ちゃんと思っていた私の勘も、当たらずしも遠からず、むしろ近いほうなんじやない、といふか、あれつ? 日本は王族なんていなかつたからあまり実感はない

けど、いつやつて身分が全く違う私が青年と同じく立つたまま話すのって、もしかしていけないこと、だつたりするんじゃない！？さつきなんて私の方が座つてこの青年立たせたまま話してたし！だからせめてと礼儀知らずの私を引っ張つて立たせたのか、そうなのか！？どうしよう、私、今からでもひれ伏した方が良い！？もう遅い、不敬罪じゃーとか言われて処罰されるかも！…そ、そそそそいえばさつき口答えなんぞしちやつた氣がするぞ、しかもあんた誰だ、つて！わああああ！いや、でも馬上から一言誰だはないよね！親しき仲にも礼儀ありだけど親しくなればもつと礼儀を重視しろ！いやいやでも王族だつたら名乗らなくたつて分かつて当たり前なんか？でもでも仕方ないじやない！王族の顔なんて見たことないに決まってるでしょ！異世界から来たんだから！名前だつて知るはずないし！そうかわつきこの青年が名乗つた後変な顔したのは『知らないのか』っていう呆れからか！納得！でもだつて、そんな王族の話なんてこの一年でほとんどしたことないのに知るか！ああでもとりあえず素直に名乗つておけば・・・そうだよ、私のモットーは地味に生きましょうなのに！何でこんな時に限つて破つてしまつたんだー！

さあーっと血の気が引いていく音がする。きっと今の私の顔青い通り越して真っ黒だよ、それこそ髪のように真っ黒だよ！黒髪といえば、あれ、とすると黒髪を持つてる私、もしかして王族以外なのに黒髪だなんて許せーんとかつてしまつぴかれちゃうの！？

ああどう考えたつて悪い方向へ！ジーザス！そんな内面の動搖が十分顔に出ていたんだと思つ。声をかけられた。

「全部口に出でいるぞ。面白いが、そろそろ落ち着いたらどうだ」「顔じゃなくて口に出ていたか！しまつた！ではなくて、ここにこれ

が落ち着いてなんかいられますかってのよ！
私がこんなにてんぱつているのに、青年は動じず、ついにまた笑う。

「喜べ、処罰はしない」

「・・・ほ、本当？」

「ほり、とした、のもつかの間でした。

「ただし」

「・・・ん？」

「俺の妻となるならな」

「・・・・はー？」

「あ、やっぱりやっかい」とこ膝を込まれてしましましたよ。私の勘つて当たるんです。

この際占い師に転職しあやおうかな。

06 学校みたいにさ、避難経路図掲示しませんか？

あの後。私の意思（拒否）を「ことじ」と「わらわら」と気持ちの良い
くらいに無視なさった青年ジョン・イルは、あつと「う間に私を彼の
おうちらしいお城へと連れ去つてしましました。その人さらいは今、
私を荷物のように抱えてお城の廊下を歩いています。もちろん、メ
イドさんや騎士さんたちの熱い視線を集めてね。わあつ、こんな
に注目されたの、生まれて初めて！・・・全つ然嬉しくないけど。
とにかく、まあ視線が熱いかどうかはともかくとして、せつから
その視線が痛くて痛くて。もともと地味に過ぎにして人の注目を浴び
るのが苦手な私にとっては、恥ずかしいたらありやしない。おかげ
で顔も上げられません。仕方がないので人さらいの背中に顔を埋
めています。ものすーごく、嫌だけど。ああ、むしろ暴れて逃げち
やおうかなーとも思つたけれど、体が痛くてそれもかなわない。あ
あ、なんてかわいそうな私。
さあ、私の運命やいかに！？

「人さらいなどと。人聞きの悪いことを言つな

「ひつ」

「氣をつけろ。さつきから思つてこることがダダ漏れだ」

「・・・・・・」

氣をつけましょう、けど、本当のことでしょう。

最初は敬語で話そとがんばっていた私だったけれど、無礼極まり
ないこの青年と話していると次第にどうしても敬語でなくなつてしまふ。どうしてだ。日本では礼儀正しいと定評があつたのに。まあ、
ということで仕方がないのでもう努力はやめた。相手も気にしない
ようだから、私も気にしないことにした。あれ、私こんな子だった
つけ。

はあ。それにしても、ずいぶんなやつかい」とに巻き込まれた気がします。相変わらずこの青年は何考えてるのか分からないし。

「逃げようなんて考えるなよ」

「逃げ出したい理由を作ってるのはどーこのどこつよ」

「王族となることが不満か? まさか?」

「その自分中心で世界が回ると思つてるのが腹立つわ」

「・・・王族に対しずいぶんな口の利き方だな」

「あなたもね。人との関わり方、一から勉強したら」

「・・・・・」

「・・・・・」

ああ言えればこいつ直つ。ああ腹立つわ。この青年とは何があつても相容れる気がしない。

「おまえがどう思おうが、話は進める」

「私はその話に了承してないしする気もない」

「拒否権があると思うか」

「日本ではね、結婚は両者の合意に基づくの。一人の意思だけじゃできないのよ」

「異世界の話か? 残念だが、ここでは効力を持たないな」

「知ってるわよ。でもそういう世界で育つてきた私に求婚するのなら当然考慮して欲しいわね。強硬手段をとるのなら何が何でも逃げ出してやる」

「逃げ出すのは最善の策とは言えないが」

「だから説明しなさいってば」

「おまえには関係ない」

「思いつきましたよ」

なことは言わせない。ここまできて関係ないとはなんだ、関係ないとは。本当にないのなら、私でなくて良いのなら早くマーサの家に帰せ。

・・・そうだ、マーサ！

「ねえ、ちょっと」

「うるさい、もう黙れ」

「うるさい、じゃない！本当に困るんだってば！私、家に帰らないとー！」

さきと今頃心配している。

宿屋を出たのがお昼ご飯を食べた後で、今は太陽がだいぶ傾いている。心配して外に探しに出てこるかもしれない。

帰りたい。帰れない。

ただでさえここは王城なんだ。さきは逃げ出す、なんて言つたけれど、今この怪我をした状態で逃げ切れるなんて思えない。とりあえずは逃げずに様子見かな。

それに、逃げたら逃げたで問題が起つても困るじ。青年、得策じやないって言い切つたしね、逃げ出したら何かあると想つ。そういえば連れてこられる前、妻になるなら処罰はしないって言つた気がする。言つたよね？ ということは拒否したら処罰されちゃうってこと？ 得策じゃないってそういう

「後で使いをやるよ。その時に金でも渡しておくか？」

「・・・な

何を考えているんだ。それまで考えていたことが一瞬で真っ白になる。

どうしてそういう話になる。お金とかそういう問題じゃないでしょ。これだから金持ちは！お金さえあれば全て解決できると思っているんだから！というか、そんなことをされたら、まるで私がお金で買われたみたいじゃないか！王族が人身売買着手か！？それよりも私をなんだと思っているんだ！！

カツと頭に来て、痛みのない左膝で青年の腹を蹴る。そりやあもつ、思いつ切り、遠慮なく全身全霊込めてね！

「・・・」

これが少しばかり効いたようで（鳩尾だつたみたいですよ）、歩みが止まり、私を抱える腕がゆるんだ。

やつちやつた。

そう思つた次の瞬間には、私は青年から飛び降りていた。尻餅をつきそうになるのをどうにかこらえ、走り出す。
相も変わらず、右腕は痛いし右足も痛い。けど、そんなのかまつている場合じやない。

「つ 待て！」

待てと言われて待つほどお馬鹿じやありませんからーいーだ！

さつきまで、体が痛くて逃げられないなんて思つていたけれど、やつてみればできるもんだ。なーんだ、はじめからこうすれば良かつたんだ。むしろあの森で振り切れれば良かつたのかも。
・・・ん？あれ、そういうべき妻になるの拒否したら処罰かどうかって考えてたんだっけ。それに逃げても得策じやないとか言わ

れて様子見しようと思い直したばかりだつた気がする。しかも、あの瞬間は忘れていたけれど、私が蹴った人物つて、王族の一人、・らしいんだけど。この場合つてどうなるの、やっぱ何か罰せられたり・・・。

「・・・・・」

まあいつか。どうにかなるはずー異世界に落ちても何とかやつきたんだから!

そう開き直つた。いや、この場合開き直るしかないよね!

ほらほら、よく田には田を、歯には歯をつて言ひじやないー蹴られるくらい無神経なことを言つたんだから、仕様がないよねーこれくらい当然の報いよ。少しは思い知ればいいわー・・・と自分を正当化させてみるけど。本当は、蹴るなんてことしちゃいけないのは分かつてゐるんだよ。だけど、やつちやつたもんは仕方がないもん!

そう頭の中もフル回転させながら全速力で走る。自慢じゃないけど、これでも中学校の時にはリレーの選手に選ばれてたくらいには足が速かったです。高校に入つて、背がぐんぐん伸びちゃつて、体の変化についていけなくて少し遅くなつちゃつたけれど、それでも十分早いほうだと思う。

廊下を走つて、突き当たりを曲がつて、また曲がつて。どこをどう行けば出口に出られるのかは分からぬけれど、とにかくがむしゃらに走つた。抱えられていたとき、階段はまだ一階分しか登つていなかつたはずだから、ここは一階だろうと見当をつけた。まあ、まずは階段を探して一階に降りなきや!

「おこー。」

うわ、結構青年も速いじゃない。何度も言うが、中学校の時には陸上部員とサッカー部員の精鋭をのぞいて、男子にも負けなかつたのに。私つたらこの一年でそんなに遅くなつちやつたかしさ。ああ、それとも日本人男子と青年の足の長さの差かな？

なーんて考えるくらいには余裕があるみたい、私。でも後ろは振り向かない。だつて、その分ロスになっちゃうでしょ？

・・・というか、さつきから走れど走れど階段が見つかりません。目印代わりにとチェックしていた通路に掛けられている絵が違うから、同じところは走っていないと思つんだけど・・・おおつと、まづい、行き止まりだ！

角を曲がつたら、窓が一つ。とりあえず窓に駆け寄り、下をのぞく。ひえ、思つていたよりちょっと高い。

「残念だつたな」

声をかけられ後ろを振り返ると、青年も角を曲がつたところだつた。ここまでたどり着くのにあと二十メートル、くらい、かな。逃げられないことを知つているからか、青年の歩みがゆっくりになる。まるで連れられない獲物のおびえる姿を楽しむ獣みたいだ。くそう。

「鬼」つこは終わりか？

くそう、このいやみ男！

「・・・すぐに終わつたらゲームは面白くないでしょ」

「早く終わらせた方が時間の有効活用ができると思わないか？」

「知らないわよそんなの。・・・私は帰るの。何か言いたいことでも？」

「『逃げるのは得策とは言えない』。さつき言つたばかりだが、「だからと言つて、ここに残つてあなたと結婚することに私はなんの魅力も感じないわ」

「それは残念。だが逃げられては困る。それに・・・」

につり。人形のように綺麗な笑顔。この顔だけを見た女の子はきっと、目がハートになるんだろう。中身を知つてしまつた私は、そんな思いを抱くことは一生ないだうけれど。

「腹を蹴つておいて謝りもしないじゃじゃ馬娘に礼儀を教えてやらないとな」

「自業自得でしうが。全身全靈で遠慮申し上げますよ」

体の向きは青年に向けて緊張感を保つたまま、先程見つけた、丸く綺麗にカットされた木々にこつそりと視線を移す。

一階の高さ、前には青年。

・・・天秤にかけることなんてしなくて、答えは最初から決まつている。

「追いかけつけは終わりよ」

素早く振り向いて窓枠に足をかける。青年が田を見開いたのがちらりと見えた。おや、そんな顔もできるんじゃない。

「残念なのは、あなたの方ね！」

全部あんたの思い通りにさせてたまるかってんですよーへつへーんだ！

捨て台詞だつてバツチリ決めて、迷わず窓から飛び降りた。

07 たかがかくれんぼ？いやいや命がけですから！

そうして、今に至る。

今は夕暮れ、太陽がヒルの何倍もに大きく大きくなつて地平線に沈もうとしています。

え、私？何してるのかつて？

もちろん、悪の手から逃れようと逃亡真っ最中ですとも！
どこに向かつて？そりやあもちろん、ブルル村へ！向かつていた、
はず、なんだけれども・・・。

さあ問題です。私は今どこにいるでしょーかつ？

「・・・・・」

ああ残念！時間切れ！答えは・・・・・。

私も分かりません！えへつ。

その後、窓から飛び降りた私は、狙つたとおりの木々の上に着地できた。そう、そこまでは良かつたのよ。落ちた衝撃は木々が吸収してくれたから、怪我の痛みも悪化することはなかつたし。でもそこからが問題だつた。私が飛び降りたのは、お城の城壁の内側。つまり、城壁をどうにかして突破しなきゃいけないのです。仕方がないので、城壁に沿つて抜け穴探しをしていたただけれど、途中で今度はメイドさんらしき集団や見回りの衛兵さんたちに見つかりそうになつちやつて。隠れつつ移動していたら・・・奥へと入り込んでいたみたいです。

どこをどう歩いたかも覚えていないし……ああ、とりあえず誰にも見つからないようにしなくちゃ。服も汚れているし、それ以前に着ているのがこんな村人丸出しの服じゃあね。どうやっても使用人には見えないわ。あやしいやつーとかってバツサリされても仕方ない状況ね。

「……行つた、かな？」

柱の陰から向こう側をそっと窺う。さつきも危なく見回り中の衛兵さんに見つかりそうになつて、この柱に隠れてやり過ごしたの。その衛兵さんの姿はもう見えなくつて、助かつたと胸をなで下ろす。あそこで青年を蹴つて逃げることを決めたのは私なんだけど、やっぱりなかなか王城は逃げることを許してはくれないみたいだ。まあ、それだからこそ逃げ出しがいがあるつてもんよね！……と前向きに考えることにする。

柱から顔をちよこつと出して、誰もいないことを確認してからまたそろそろと移動する。もうどちらに行けばいいか分からなくて、勘に頼るばかり。……いやいや、私の勘つて的中率が高いんだつた。今回だつて、きっとそうに違ひない！そう自分を励ましながらたどり着いた先は

・・・回廊、というのだろうか。海外に行つたことがないから、これがそうなのかどうかは分からぬけれど。目の前には大きな中庭、とそれを取り囲むような廊下。

中庭はよく手入れされていた。背の低い木々は綺麗にカッティングされているし、庭のあちらこちらで白、黄色、ピンク、様々な色や種類の花が咲き誇っている。ふいに水の音がして視線を動かして探してみると、回廊の四隅に小さな噴水が。わあ、なんだか物語に出てくるお城みたい。……まあ、本当にお城なんだけど。

ああ、庭の真ん中に進み出で、お花畠の中心に行つてみたい。
素敵な雰囲気の回廊。花の咲く中庭。そこに女の子が一人。なんか
これつて。

「・・・お姫さまみたいじゃない？」

ちょつと笑う。安易すぎるか。こんな簡素なワンピースのお姫さま
なんて聞いたこともない。靴だつてもらい物だし。想像するのはち
ょつと難しいかなあ。でもね、私だつて曲がりなりにも女の子だも
ん、少しくらい夢くらい見たつて良いよね。

・・・なーんて、油断したのがいけなかつた。

「お姉ちゃん、だあれ？」

びぐびぐびくつ！なんといふこと！足音も話しそうもしなかつたし、
さつき見たときは誰もいなかつたのに！そう思いながらそろそろと
振り返ると、・・・小さな小さな金髪の天使が私を見上げていたの
です。

「・・・え・・・つと・・・・・・」
「お姫さん？お城に遊びに来たの？」

首をかしげて私を見つめる、碧の瞳。ああ、顔に対してもんて大き

な目！こぼれ落ちそう！

改めてよく見れば、この小さい天使が身につけているのは私の服とは次元が違う、上質なもの。きっとこの子も王族の一人とか、そういう感じだろう。間違ってはないと思つ。ああ私つて、今日は『王族』から逃れられない運命なの？今まで一人も会つたことがなかつたのに、今日一日で（おそらく）三人だよ！人生最高記録更新中だよ！

うつと。どうしよう。子どもとはいえ、（おそらく）王族だし。（おそらく）王族だけ子どもだし。まこうと思えば簡単にまけるとは思つけど、せつかくだから出口を教えてもらえないかな。

でももし本当に王族であれば、いくら幼くともこちら辺はしつかり教育されているかもしない。

そこまで考えたとき、カツ、カツと足音が回廊に響き渡つた。ままままずい、誰か来たのかも！

急いであたりを見回すが、回廊の柱の陰などはすぐに見つかっちゃうだろ？し、隠れるなら中庭のどこかしかない。いや、回廊だからむしろ中庭は隠れる様が丸見え！？い、いやいや、音をよく聞いてみれば、回廊に向かっている足音、みたいな気がする。とにかく行くなら今しかない！え~~~~~！と勢いよく踏み出そうとしたが、はたと気がつく。

この子はどうしよう。

残していけば、遊びだと思つて元気よく追いかけてくるかもしれない。そうじゃなくとも、ここに向かっている人に私の場所を教えてしまつたら。

・・・よし。

「ねえ、お姉ちゃんと一緒にかくれんぼしちゃー。」

「かくれんぼ?」

「そう、お姉ちゃんね、鬼さんから逃げてこる途中なの、一緒に隠れよー。」

不思議そつな顔から一点、少年の顔が輝いた。ああ、笑顔が可愛い！まぶしきーやっぱり天使に見えるよー

「うふー！」

そうして私たちは手を取り合ひ（とこいつ私が抱きかかるよう）中庭へ飛び出した。

背の低い木々のあたりにしゃがみこんで隠れる。茂った縁の葉が隠れた上に覆い被さつて、良い具合に体を隠してくれている、ような気がする。

誰の足音なんだら？メイドさん？衛兵さん？それとも、青年関係？足音がだいぶ近くなつた。足音の持ち主はとうとう回廊へとたどり着いたらしく。どうぞどうぞ、見つかりませんよつ。

「・・・・・・？」

足音が止まつた。

え、どうじ？あ、あれだよね、きっと、中庭の花々に感心しているんだよね。私たちが見つかつたわけじゃあ、ないよね？

それからしじばらくしても、足音は聞こえてこない。だんだんと手に汗がにじんできて、つい少年と繋いでいる手をぎゅっと握った。すると、ぎゅっと握り返してくれた、小さな手。（大丈夫だよ）少年がにっこりと勇気づけるように笑っていた。

この少年はきっと、本当にかくれんぼをしていると思つてゐるに違いない。見つかっちゃつたら罰せられるかもしない、なんて切羽詰まつた私の事情、知るはずもないだろう。それでもずいぶんと勇気づけられて、私もちょつと笑い返した。

しばらくして、誰かが駆けてくる足音が聞こえた。それも、一人じやなく複数人の足音。な、ななな何事！？

縮こめた体を、気持ちさらりに折り曲げてみる。ああ、体が小さかつたら隣の少年のようにもつと容易に隠れることができたのに。どうしてこんなによきよき伸びてしまつたんだ！・・・じこで嘆いても仕方がないことだけど。

息をひそめて耳をそばだてる。隣の少年は、何も話していないのに心得たもので、身動きせず、静かに隠れている。なんて物わかりのよい子なんだろう、と思ったその時、ぼそぼそと会話が聞こえてきた。

「城門・・・より・・・」「・・・」うちに・・・田撃したと・・・
「使用者から・・・との苦情が・・・」「・・・」足止めも限界に・・・

会話の内容からするに、集団は誰かを捜しているらしい。誰のことかって、まあ、今考えられるのは私くらいだけ。でも、足止めつて？

「王子に恨みはないが・・・」

突然、声が耳に明瞭に届いた。・・・王子？

「聞かれてしまった以上は仕方がない。幼い子どもを手にかけるのは少々気が引けるが」

「……聞かれてしまった？ 幼い子どもって？ 手に、かけるつて？」

「見つけ次第連れ出し 消せ」

「…………何？どうこう」と？

この人たちが探しているのは、私じゃない。え、ちょっと待つてよ。幼い、と、王子、という言葉から連想するのは、話をしている人たちが探しているのは、…………この子、だ。この子は王子で、話の内容からすれば、きっと聞いてはいけないこと、聞かれちゃまづいことを聞いたんだろう。そして今、命が狙われているんだ。もし仮に違っていたとしても、この話を聞いたことで、この子と私は狙われる理由ができてしまった。

隣を見る。手を握ったままの少年は、膝に顔を埋めて座っていた。今の話が聞こえたかどうかは分からぬし、聞こえたとしてもどういう内容かは分かつていらないかもしない。ただ、見えない表情が気にかかる。

ふと、私の視線を感じたのか顔を上げたそこには、さつきと変わらない笑顔。・・・ああ。さつきとは違う理由で汗が噴き出た。

聞こえたことを整理してみる。そこにいる集団は、王子がこちらに来たという情報を得て、使用人たちを足止めをしているのだ。うつ。そうして今、使用人からの苦情が出始めているらしい。ということは、事を大きくしたいはずもない集団は、おそらくそれほどに長くはここに留まらないはず。ここで、音を立てず、動かず、静かにしていれば、・・・見つからない、はず。

大丈夫、大丈夫、大丈夫。

心臓の鼓動が早くなる。体が心臓の鼓動に合わせて大きく揺れる感覚を覚える。

汗でじつとり湿った手で、もう一度、少年の手を強く握りしめた。

それからしばらくして、ようやく数人分の足音が遠ざかっていった。話し声は聞こえない。足音も聞こえない。もう、大丈夫？

助かった。そう思い、ほっと息を吐いた。

しかし。

「ひづらにいらしたのですね」

「！」

頭上から聞こえた、先程の声。

ああ、
どうして。

08 熊に背中見せひきいけなこって、本当ですか？

「お探ししましたよ」

穏やかな話し方。柔軟な人、そんな印象。それでも、先程の言葉を発していたのは、確かにこの声だ。振り向かぬきや。そう思つても、体が動かない。

「バニアス？」

子どもも独特の高い声が聞こえた。聞こえると同時に、握っていた手が離れていく。

はっと隣を見ると、少年が後ろを振り返り、立ち上がるといつだつた。

「お勉強の時間に姿が見えないと、監督すつとお探ししてましたんですよ」

「・・・じめんなさい」

「お城の探検もよろしいですが、王子たる者、國のためにも多くを勉強していただかないと」

「・・・うん、これからは気をつけよう」

ほらね、やっぱっこいの少年は王子だった。やうじやないかと思つたんだ。

それにしても、王子と臣下のこのやつとっこ、ビルにも違和感なんて感じない。すぐ襲われちゃうんじゃないかとひやひやしていたのに。

さつきのはもしかして違う人の声だったのかな。それとも、聞き間違い？私の思い込みか勘違い？

少し気が緩み、私も王子にならって振り向くと、そこにいたのは中年の男。
目が合いつ。

「・・・・・」

さつきのがもし私の勘違いなのだとしたら、この状況はあまりよろしくない気がする。ううん、勘違いだったらそれもそれでとても大変なことなんだけれども。

例えさつきのが私の勘違いで、この人がなんの企みも考えていないただの（ただのつていうのも変だけれど）臣下だとしたら、王子と一緒にいる見知らぬ人物を見過ごすことなどあり得ない。

「何者」

「え・・・・・」

そうですね、何者だ、本当そっだと思います。ああ困った。ここで正直に「ジエニールとかいう馬鹿男に無理矢理連れてこられてどうにかこうにか抜け出して現在逃亡中の村人です」なんて言つたつて信じてもらえるわけがないし。

「・・・まあ、その身なりからして、食材でも運んできた村人であろう。道に迷うでもしたか」

「え、と・・・はい、あの」

なんと答えたなら良いものが分からず、口へもる。中年男性にじろじろと見られながら、どうすることもできず、私も困ったまま見つめ返す。ふと、中年男性の表情が変わった。

「・・・これはなんとも、まあ
「・・・？」

「いや・・・どうぞへ連れて行つてからとも思つたが、これは都合
が良い」と。天は私に味方しているらしい」

突然、機嫌が良くなつた男は、笑いながら小さな剣を腰から抜く。
え、ちょ、ちょっと待つて！－いや、表情と行動のつながりが全く
もつて見えないんですけど！

剣こいつも向けないで！小さな剣でも怖いから！

「バニーストースト止めて！」
「えつ、いや、だめだつて出できちゃ－」

「ねえバニーストースト、どうしたの、お姉ちゃんは悪い人じやないよ、僕
と遊んでくれてるんだよ！」

さすがになんとか危ないぞつていうことが理解できたらしい王子は、
私の前に立つて必死に私を弁護し始める。ちょっと格好良いし嬉し
いけど、でも危ないから！ね！

視線はバニーストーストという男にはり付けたまま、王子をどうにか横に避けようとするが、絶対に動こうとしない。それどころか、私の腰に
がつしりと抱きついてきた。

「だめだつてば、離れて！」

「いやだ！お姉ちゃん、悪い人じやないもん！」

「ピンポン全くその通り！全然悪くないけど、この状況じやあなた
も危ないでしょー！」

「大丈夫、ぼ、僕が守つてあげるから！」

さすが王子さまと感心しかけるけど、私のことなんか気にしないで
とにかく下がつてて！むしろ私だけが危ないならここをダッシュ

れば良いだけの話だから！狙われていたわけじゃないのなら、わざ危ないところに自分から飛び込んで来なくていいのよー。しかしその思いは小さなナイトには伝わらない。

しばらくそんなやりとりを続けていると、ふいにバニアスと呼ばれた男が剣を下ろした。・・・あれ、もしかして助かった？なんて思つたけれど。

「大丈夫ですよ。」安心くださー、ホルンさま

男は中腰になり、王子を安心させるように、優しく語りかける。

でも、・・・私は気づいてしまった。この人は優しくなんか、ない。だって、顔は笑っているけれど、声も田も、笑ってなんか、いない。

「すぐに同じ場所へと連れて行つて差し上げますから」

男の持つ空気ががらりと変わった。やつぱり、私の勘違いなんかじやなかつたんだ。

王子に向けている目を、こちらに向ける。怖い。心臓はこれ以上ないほどに早く打つてるし、汗が次々噴き出してくるし、体が緊張して固まりそうだけれど、怯むわけにはいかない。思わず王子の体をぎゅっと抱きしめる。

「どうせ女は我々の話を聞いていたのだらう」

しうぱつくれたつて、きつと通じない。

「・・・聞、いてたわよ。あんたたちが、企んでること、詳しく述べ

知らないけど、・・・何をしようとしたのかは」の耳でちやーんと聞いたんだから」

「それならば女、王子一人で旅立つのは心細く可哀想とは思わないか? 王子はえらくお前を気に入っている様子、供してやれ」「お断りします!」この子にだってそんなことさせるわけないでしょ! それにそんなこと言つて、どうせ私に罪をなすりつける気なんでしょう」

話は断片的にしか聞こえてこなかつたけれど、それをつなぎ合わせて、今、ようやく分かつた。さつきの『都合が良い』といふ言葉の意味も、考えればすぐに出てくる。この男や仲間は、この王子をどこかへ連れ出してどうにかする予定だったのだらうけど、私も一緒に始末することだ、誰にも見つからずに連れ出すなんて危ないことしなくて良くなつたんだ。なぜって、『見知らぬあやしい女が王子を手にかけた、そのため自分が女を始末したのだ』などと大声で嘆いてまわれば、男は疑われることがないからね。・・・分かつたけれど、そんな思い通りにさせるもんですか!

「・・・頭は悪くないようだな

「事情はよく分からぬけれど、何かまことに聞かれたんだつたら、こんな子どもに聞かれるようなことひどい話をしてたあんたたちが悪いのよ!」

「小声で話していたはずだつたが、そこまで聞こえていたか。ならばどうにじる生かしてはおけぬ」

まづい。ついに腰に抱きつこうとした王子を無理矢理引きはがして背に隠し、じりじりと後退する。

ああ、熊と出合つてしまつたときはこんな感じなのかもしれない。遠足で山登りするときに、熊には背中を見せちゃいけないよつて言われた気がする。あれ、違う? もうと昔のことだから確かじゃない。

日本にもし帰れたら調べてみよ。

田を離さず、背を向けず、隙を作らず。王子はその間も必死で私の前に出ようとするけれど、お願ひだから大人しく隠れていて！と私も必死で背中にはり付けさせる。

私一人だったら、どうにか逃げ切れるかもしない。だけど、この子はどうする。抱えて走って、逃げ切れるのか。

あの青年との時とは比べものにならない。絶体絶命、大ピンチだ。
いつの間にか辺りは暗くなっていた。この薄暗い中でも、男の持つ剣は月の光を反射し、ぎらりと光る。結構小さめの剣だけど、刺されたらやっぱり、大変なことになっちゃうのかな。・・・なっちゃうよね。

「うなつたら、腹をくくるしかない。

「王子、逃げて」

「に、逃げないよ！」

「逃げるの！それで、誰か人を連れてきてちょうどいい、できるだけ、早く」

それが一番、一人で生き残れる可能性が高いから、と。それでも王子は迷つているようだった。

迷うのも、分かるけれど。早く逃げて、早く早く、できるだけ遠くへ。

睨み合いのこの状態がいつまで続くか分からない。もしかしたら次の瞬間に終わりが来るかもしれない。
だから、その前に。

「私を助けたいと思つなり、お願ひだから」と私の背中に顔を
ね?」

優しく、懇願するよひにまつと、王子はぎゅうつと私の背中に顔を
埋めた。

「・・・また、遊んでくれる?」

その言葉に、なんだか笑いたくなつた。可愛にな、のんきにやつ
思った。

「約束する」

「約束だよ」

「それは困りますね」

・・・もう一せつからく良じ雰囲気だつたのに、入つてこないでよ。

「私だつて今の状況は困つてるんだけど」

「困らせるほどの時間を『』えてしまつた私が不親切でしたね。

・・・それでは、そろそろ終わりにしましょつか。私も暇ではない

ほらね。終わりが来る。探し合いのにらめっこも、・・・中庭の散
歩も。気がつけばすぐ後ろは回廊。コツ、と王子が回廊の床に到着
した音が聞こえて。それが合図となつた。

「走つて!」

「やせるか!」

私の言葉と腕に押され走り出した王子。男は私より先に王子を優先させようと判断し、追いかける体勢に入つて一步踏み出す。私から視線が逸れた。

男のマントをつかむ。

振り返つたその男の、顔。ああなんて醜い。人は罪を犯すとき、こんな顔をしているのか。

「余計な事を」

頭上で銀に光る、これは。

・・・やられる
。

今日はなんて厄日なんだろう。思い浮かぶのは、日本の友だち、マーサ、旦那さん、村の人たち、そして、・・・ジュリエッタに馬鹿男。王子は、どこまで行けたかな。後ろを振り向かずには懸命に走つて。どうかこの男の仲間に、見つかりませんように。この短時間で次々と思い浮かぶ、これが走馬燈？

銀色から瞼の中に瞳を隠し、再び開いた私の目に飛び込んできたのは月の光を受けて白く輝く金色。そして、ざふ、という嫌な音。

「この馬鹿女」

・・・懐かしいな、そう思った。

09 だつて名前呼ばれたらつい振り向こひやひづな。 (前書き)

ひどくはないですが、何ヵ所か流血表現があります。苦手な方には
読まれるのをおすすめしませんが、もし読まれる場合はお気をつけ
てご覧くださいませ。

09 だつて名前呼ばれたらつこ振り回こひきまわる。

実際には、懐かしいと思つほど離れていたわけではないけれど。
せいぜい一時間か一時間くらいだらう。それでもそつ感じのくらい、
私にはとてもとても長かった。

変なの。最初はこの青年のせいでずっと緊張していたのに、今はな
ぜか緊張でなく安心を覚える。どこかで、もう大丈夫だと、ほつと
している自分がいる。まだ味方と決まったわけじゃないのに。

「おひ・・・王子殿下!？」

田の前に広い背中があつて、私のところから男の顔を見るひとまで
きない。それでも、すくなく狼狽しているらしさとは伝わってくる。

「も、申し訳ござりません!すぐに手当てを・・・」

「良い。それよりもバニアス、何をしていた?」

手当つて?

ぼた、と小さな音がする。音の先を探つていくと、視線は自然と下
へ。

暗くてよく見えないけれど、中庭のよく刈り取られた草の上に、黒
い点々が。ああ、また落ちた。何だらう。それに、・・・さつきの、
嫌な音は。

「そ、それは・・・」

「なんだ、この俺にもすぐには言えぬ事か?何か言えぬ事情でも?
「と、とんでもない!その娘、あ、怪しいと思いませぬか。先程、
あの、ホルン王子と一緒にいるところを目撃しまして。引きはがし

て王子の身の安全は確保しましたが、何を企んでいるのか知れぬこの娘については災いを及ぼす前に即刻処分せねばと……

その言葉に、点々に釘付けだった視線をぐっと上げる。

嘘をつけ！災いをもたらそうと思つてるのはあんたでしょ！？よくそう嘘をペラペラと…よーし分かつた、そんなに望むなら願い通りそんな舌は今すぐ引っ抜いてやる！…そう、目の前の背中から勇み出ようとし、…青年の左腕に止められた。なんだ、男を庇うなんて実はやつぱり味方じゃなかつたのか！？敵か！？よしじやああんたのも…なんてカーッとして文句を言おうとした次の瞬間、その腕に刃が釘付けとなつた。赤かつた。ひえ、血、これって血だよ、血がどばどば出てるよ！やつぱりさつきの、ぽたつていう音つてこれが草の上に落ちる音だつたんだよ！

青年は男の方を見ていて、こちらからは顔が見えない。でもきっと、平然として表情を全く変えないでいるんだろう。今こいつやって話をしている最中だつて、痛みをこちらに少しも感じさせない。だけど絶対に痛いはずだ。だつて見ている私がこんなに痛い！

腕に刺激がいかないように注意しながら、背中の服を握つて揺さぶるけれど、何も反応してくれない。ねえ、大丈夫なの、これ。

「どうか、ホルンを」

「臣下として、当然のつとめで」ぞひますから。…つきましては、王子殿下のお汚しとなりますし、お手を煩わせたくもないませんので、この場は是非私に…」

「俺はてっきり、自らの企みが露見し、口封じのためにホルンと娘を始末するのかと、先程の話や行いより見当をつけて見ていたのだが…俺の思い違いだったようだな？」

・・・あれ、今見ていたつて言つた？

「・・・お、王子殿下・・・？」

「知っていたか？この中庭の名を。・・・レスティアルロビア、古代の言葉で『妖精の懐』という意味らしい。逢い引きや内緒話をしても、懐に入れて守るように、妖精がそれを外界から隠してくれるからだそうだ」

「・・・・・何の話を、」

「しかし妖精の機嫌を損ねるような真似をすると、逆にどんなに小声で話しても、はるか遠くにいる者にまで声が届くらしい」

小声が遠くまで・・・？ そういえば、ホルン王子と隠れていると、男たちの会話が途中からやけにはつきりと聞こえ始めたんだった。それは、じゃあ、男たちが妖精の機嫌を損ねたから聞こえるようになつたつていうこと？・・・当たり前のようだ。妖精つて言つてるけど、妖精つて実際にいるの？・・・不思議だわ・・・。

青年の背中からひょいと顔を出して男を見ると、さああーっと音が聞こえてきそうな勢いで男の顔が白くなつていぐ。おおお、これが血の気が引くつてことか。

「ま、まさか・・・」

「この中庭で事を行う際には気をつけた方がいい。奥で人通りも少なく、格好の場所と判断したのだろうが・・・。妖精はお前の行いに腹を立てたらしいな。回廊より遠くにいた俺の耳にも、娘やホルン、そしてお前の会話が届いてきたぞ。・・・言い逃れは、できないと思うがな」

「・・・つ！」

白を通り越していよいよ透け始める！？かと思われた男が、剣を握りしめる、のを見た。あ、と思ったときには大きく振りかぶってい

た。

そして私は、青年の左腕にはじき飛ばされ尻餅をつく。痛い！何するんだ！いやそんなことより、男は！？青年は！？どうなったの！？急いで顔を上げると、・・・って、あれ？

「結果など見えているだろうに。諦めの悪い」

すらりと長い剣を持った青年を挟んだ向こう側に、男が仰向けで倒れていた。

え、これってもしかして・・・やつちやつたの！？焦つて青年を振り仰ぐと、青年が首を振った。

「剣で受け止めて蹴飛ばしだけだ。頭でも打つなんじゃないか」

つまりん、弱すぎだ、根性のない、とか呆れたような聲音でぶつぶつ呟いている。ああ、やつつけちゃつたんじゃなくて良かつた。男がしようと/orして行行為を青年がしたのでなくて良かつた。何が良かつたのかは、自分でもよく分からぬけれど、ほっと息をつく。そうしているうちに、複数人の足音が聞こえ始めた。すぐに騎士の集団が現れ、青年が指示をするとあつという間に伸びている男を連れて去つていき・・・。

そしてまた、出合つたときのように、また一人きりとなつた。

「全く・・・馬に踏まれ、二階から飛び降り、次は命を狙われて？」

忙しいやつだな

「…………」

私の前に膝をつく青年。私だって好きでそうなつてるわけじゃないから。そうは思つても全くもつてその通りなので、心の中だけで突つ込んでみた。・・・そんなことより。

「ねえ、どうしてこんなことしたの？」

「・・・こんなこと、は何を指してるんだ？」

「小さな王子を守つて、つてこののは分かるけど、私を守るのに怪我をする必要なんかないと思つ」

青年の左手首を掴み、傷を見る。傷はそこまで大きくないけれど、深いのか刺された場所が悪かったのか、血がまだ完全には止まつていない。

「腕で止めるのが一番早かつたから、こいつのは理由にはならないか？」

「違うー。さうじゃなくて・・・

そういうことじやなくて。本当に伝わつていなかの、あえて氣づかぬふりをしているのか。・・・後者の可能性の方が大きい気がする。ああ、いらっしゃしてくれる。

「ただの、村人の私なんて、こいどりにかなつたといひあなたにもこの国に支障がないはずでしょ」

「ただの村人ではないし、俺に支障がない、こいつのも間違いだな

青年の返しはもう無視した。何を言つたところで、飄々ととぼけ続けるに違ひない。

掴んでいた手を離し、ワンピースの裾のできるだけ汚れていない箇所を選んでびりびりと破く。『めん、マーサ。せつかくの服だけれど、許してね。

青年の視線を感じる。でも私は青年に話しかけず、黙々と作業を進めていった。

破いた裾は、幅がとこりどり違つて不格好だけれど、包帯に見えなくはない、・・・と思つ。

その包帯の端を傷口にあてがい、力を入れられる左の手のひらでぐつと押す。『んなひどい怪我の止血なんてしたことないけど、注射した後によく『ガーゼの上からしばらく押して止血しましょ』うね』とかつて言われるから、その大きい版だと思えばこんな感じじやないかな。

「・・・どこから聞いてたの? どうしてここが?」

「さつきも言つただろ。聞いてなかつたのか? 回廊の近くを歩いていたらおまえたち三人のやりとりが聞こえたんだよ」

「・・・」

「聞こえたのは・・・ホルンとおまえが離れる離れないのやりとりをしているあたりか。その後は、確証をつかむまでと思い、柱の陰で見ていた。・・・すぐに助けず悪かつたな」

まさかと思つたけど、やっぱり見ていたらしい。でも怒りは湧いてこなかつた。

「・・・別に、それは良いよ」

この通り、助かつたんだし。それより私、聞きたいことが。

「それより、遠くまで聞こえたつていうのは本当? 妖精の話つて、

それも本当のこと? この世界に妖精つて、本当にいるの?」

「本当、本当、本当かと質問が多いな。・・・ああ、全てその通りだ。この王城には、他にも妖精が住んでいる箇所がいくつもある。

人間の目には見えないがな」

この国じやおどぎ話のように誰もが知る有名な話なんだが、そんなことも知らないんだな。そう言つ青年。仕方ないじゃない。この世界に来たの、一年前なんだつてば。

「・・・どうした?」

「・・・不思議すぎて・・・今頭がついていつてない、かも」

「このよつな世界は嫌か?」

「・・・つうん、嫌じや・・・ない、と思う。信じられない」とばかりだけど。だけど色々な世界があつて、この世界にはこの世界のルールや常識があるわけで、この世界にお邪魔している身としては、受け入れなきやいけないんだと思つ

私にとっては不思議でも、この世界の人にとっては知らない私の方が不思議なんだろうし。こんな世界は嫌だと突つぱねて殻に籠もつてしまふのは違うと思うんだよね。嫌だとか思つ前に、少しでも世界に順応しようとななくちゃ前に進めない。生きることだってできない。知つている人や甘えられる人なんていないんだから。郷には入れば郷に従えつて言うしね。そう思ひながらこの一年を過ごして、普通の村人として生活できるくらいにはこの世界のこと、覚えたの。

「ふうん」

そつけない返事。何よ、おかしいことなんて言つてないと思つけど。そう思ひながら青年を見上げると、どことなく機嫌が良さそうに笑つていた。どうしてだろう。金色の髪が風に揺れる、その様子を見

て、あーと思に出す。

「やれよつ、あの小わなHITせまは？見ていたつてことせ、逃げた
！」とを知つているんでしょ。やつだ、あの男には仲間がいるのよー。
襲われないでちやんと逃げ切れた？」

「今頃部下が護衛をしているはずだ。望むなら、後で会わせてやる
よ」

「・・・やつが、良かつた」

あの状況で、怖かつただろうに私を守りうとしてくれた小さな男の
子。無事で本当に良かったと、胸をなで下ろした。

もつ斐いかな、と傷口にあてがつていた部分の続きを使って腕をぐ
るぐる巻きにする。

「・・・こんなこと初めてだし、正しこやつ方なんて知らないの。
だから早くお医者さんに診てもらひ」

王族専属のお医者さんだが、さうところはめずだ。

包帯だつて、きれいなところを選んだとはいつても清潔なわけじや
ない。包帯からばこ菌が入つて余計ひどくなりましたが、なんてなつ
たら全く笑えないし。血が止まつたような氣はするけど、氣のせこ
かもしれないし。

よし、やねいじとほやつた。こつまでも座つたままではこられない、

そろそろ立ち上がりなきやと思つたけれど、踏ん張ることができず、浮かせた腰をまた地につけてしまつた。困つた、一人で起き上がる事ができない。・・・ああ、そういうえば私も怪我してたんだつた。今更のように思い出す。ほんやりしていると、青年は私の左腕を引つ張つて起こしてくれた。ちょっと痛いけど。会つたばかりのあの時も同じように起こしてくれたんだつたわ。今日のことなのに、随分昔のことのような気がする。

「・・・ありがとう」

「・・・いや」

起こしてくれたことにちゃんとお礼を言つたのに、頭上で、はあ、とため息が聞こえた。出合つて初めてお礼を言つたのにそれか。

「おまえは、なんなんだ。びっくりしたいんだ」

「いや、意味分からないから。なんなんだって何」

「俺が嫌なのか、嫌でないのか、どちらだ。先程は俺から逃げたくせに、今は留まつて当然のように俺の手当をしていく」

俺の怪我などほうつて再び逃走しなくて良いのか。チャンスを逃したんじゃないのか?これから逃げようとしても無駄だぞ。そう呴かれちよつとカチンとくる。そんなこと。私を守つて怪我したのにほうつておけますか。といつより、目の前に怪我した人がいたら手当してしなきやと思うのは当たり前でしょつが。なんでこんな簡単なこと分からぬの。

「それに、明らかに自分が重傷だろ?」

え? そんなそんな、私はただ転んだときにひねつただけかもしれないし。血がだらだら出てたあなたのほうがどちらかというと重傷

でしょ「う。

「・・・とにかく、お医者さんに行く
診てもううつさ。だがおまえが先だ
え？」

「おまえの痛み方、尋常ではない。骨に異常があるかもしれない」
「え、えええ、骨に異常って。これまで骨折もねんざも経験した事がないから全く分からぬけれど。骨に異常がある様子をリアルに思い浮かべて、ひえ、と肩をすくめる。骨折って、痛いんだよ。だって、骨にひびが入つたり折れたりすることでしょう、ひいい、痛いすぎでしょ！じゃあ今感じてるこの痛みってそういう痛みなの！？うわ考えるとさらに痛みが増していく。よしよしよし、うん、考えないよ！」
「それがいい。

「それに、妻を優先させるのが当然だろ！」
「いやいやいや誰が誰の妻だよ」
「おまえが俺の妻だろ」
「だらじやない！誰がいつ決めたのよ」
「俺がさつき決めた」
「どれだけ自己中心なのよ！」

「ああ、疲れる！突っ込みが！息も荒くなってきた。そんな私の様子を見てくくく、と笑う青年。全然おかしくないから！」

「まあ、待て。分かった。ふざけるのはよそ」

ふざけてたのか？怪我人に向かって？いつから？まさか最初から？・
・叩いて良いですか。拳をつくつとぐぐぐと握りしめる。

「分かつた分かつた。順序を追つて説明しよ。そう怒るな。それに・・・何も永遠に俺の妻になれ、とは言つていなかつら」

「・・・・・・は？」

意味が分かりませんけど。永遠じゃないつこじま、え、どうこつこと。あれか。離婚するつてことか？

・・・ん? とすると・・・じゃあよつするに離婚前提の期限付き結婚つてこと? ひ、ひどいさがるー。

「・・・・い、おい一聞いてるのか?」

「もちろん聞いていませんともこの女の心をずたずたに切り裂いてそんなんに面白いですかこのやうづー！」

「・・・何を怒つているのか知らないが、話を聞けよ」

誰の言葉でこんなにこんなに嘆いていると思つてゐるんだ! 人生で初めて妻になれつて言われたそれがふざけてるのか離婚前提だなんて、そんなのつてない! 夢見る女の子になんてことをしてくれるんだ、これからいつかどこかの誰かにされるかもしれない記念すべきプロポーズに恐怖と疑心を抱いちゃつたらどうしてくれるんだ! 私とその相手に謝れ! むつと青年の顔を見るがやつぱり効き目はない。

こうなつたら絶対話なんか聞いてやるもんかとそっぽを向く。顔だって見てやらない、口だって聞かない! と子どものように意地になりかけたとき。

桜、と名前を呼ばれた。

「・・・・・・」

習慣で、そして名前を呼ばれたことに驚いて、ぱっと青年の顔を振り返つてしまつ。

「…………何

ああ悔しい。そんな私の心情にかまわず青年は、こいつら笑つて言葉を続けた。

「取引をしようぢやないか

取引？首をかしげて青年を見る。青年は「……」周囲を見渡した後、私を担いで中庭の中央へ歩き始めた。「この運ばれ方も二回目となれば慣れちゃつたわ、なーんて思うもんですか。レディをどんな抱き方してくれるんだとやつぱりバタバタしていると、草の上に静かに下ろされた。・・・まあ、一応怪我のこと考慮してくれているようだけれど、だからってさつきの抱き方は許容しませんからね。考え方をしているうちに、青年は私の前に腰を下ろしていた。一人で向かい合つて座る。・・・なんか変な感じなんですが。

リリィはレスティアルロビア。内緒話にはこの王城で一番適した場

• • • • ?

「あの男のよ」、「この話で妖精が機嫌を損ねないでくれると良いんだが」

よろしく頼むな、と誰もいなはずの周囲に声を掛ける。えーと、もしかして、妖精に話しかけたの？ 妖精がここら辺にいるの？ 妖精にそうやつて普通に声を掛けて通じるものなの？ つていうか妖精は実在するの？ ああ分からぬ。私の中で、どうしても妖精という存在がはつきりしない。考え始めるとはまつて抜けられなくなりそうだつたから、そういうものかと思考に区切りをつけた。きつといつていうんだからいるのかもしれないよね、うん。よし終わり。
ええと、確か、妖精が話を周りから隠してくれるんだつたよね。
それで・・・妖精に頼つてまで隠さなきやならない取引つて？

「おまえは自分の世界に帰りたいか」

いきなりなんの話かと思えば、話の脈絡という言葉を知っていますかと聞いたかつたけれど、見ると存外真面目な顔だったのです、とりあえず素直に答えた。

「・・・とりあえず、今は帰りたいと思つてゐる。この世界も、嫌いじゃないけど」

帰りたいのは、本当。正直に言えば日本に特に愛着があるわけじゃないけど。でもこりやつて実際離れてみると、ちよつと寂しいなと思う。たまに、ふと日本を思い出してもうして帰りたいと思うこともある。

「それなら、その世界に帰れるよう、俺の力の及ぶ範囲で協力しよう」「え？」

「この城には昔からの多くの書物がある。もしかしたら、以前にも異世界から迷い込んだ住人がいるかもしれない。そのことを記した書物を見つけ、その人物の軌跡を辿ることができれば、帰る方法を見つけることも不可能ではないと思つ。・・・まあ、あくまで可能性の話だが」「・・・・・」

「加え、こちらにおまえが迷い込んで最初に辿り着いた土地の調査もしよう。何かおまえの故国とつながるもののが見つかるかもしれない」

「それは・・・・・」

願つてもない。有り難い話、だけれど。何が目的かまだ分からぬ。

「その代わり、おまえが俺の妻となれ。千歩譲つて婚約者でも良い」「・・・いや、だからね、『その代わり』って『代わり』になつてないから。よし、順々に話そう。ね。話を整理するの手伝つてあげ

る。気づいてないかも知れないけど、全くつながってないから。しかも百歩じゃなくて千歩かい、微妙に多いわ！」

「落ち着きがないな。最後まで聞け」

「誰のせいよ！」

「俺は表向き、この国的第一王子、となつている」

無視ですか。

「こまま何事も起きなければ、次の王位の座は俺が即くのだろう。そのためかここしばらく見合い話が多くて困つていてな。貴族の娘に他国の王女まで……王妃という、この國の最高位とまではいかなくとも同等の権力を持つ座を欲しているんだろう。それを狙つているのが当人か、それともその背後にある者か、それは分からんが……だが、あいにく俺は婚姻などするつもりはない

「…………それは、どうして？」

「王妃の座に即いたからと、自分の存在意味を勘違いして国政へ口出しをされれば迷惑だ。それに、王妃の近親者がさらなる権力欲しさにこ機嫌伺いに来られるのも面倒だ」

「まあ……それはそうかもしれないけど

「それに、今のところ女にも興味がない
「…………ええと、お話の腰を折つて申し訳ございませんが、じゃあ男し……」
「それ以上口にすれば首が飛ぶと思え」

「…………」
「それに、今のところ女にも興味がない
「…………ええと、お話の腰を折つて申し訳ございませんが、じゃあ男し……」
「それ以上口にすれば首が飛ぶと思え」

ひええ！怖いよ！怖いから！だつてだつて自分で言つたじやん！女

に興味がないって！

「言つておぐが、そういう趣味を持ち合わせているわけじゃない。」

・・女のあのねつとりした話し方や振る舞い方、けばけばしい化粧とその臭い・・・。昔から女は好かん。皆たぬきに見えて仕方がない

い

「・・・はあ

ええと、ですね。個人がどう思おうが自由ではあるんですけど、女が好かないとかたぬきとか、私に面と向かって堂々と言わないでくれないかな。言いたいことは分かるけど。実際女社会の一部はどうろしちやつたりしていることもたまーにあるけど。でもねえ、もしや今更知らなかつたとは言わせませんよ、確認しておきますが散々な言われようの“女”つていうカテゴリーの中に私も一応入つているんですよ。そこは言葉を濁すとか、ちょっとは配慮しようよ。

「その点おまえは、性別は女だろうが、見た目も中身も少年のようだ。化粧の臭いもしない。女に接している気がしない」

「は、・・・見た目も中身も、つて・・・」

ちょっととちょっと、女に接している気がしないってかなり失礼じゃないですか。あんた何様。・・・王子さまか。こんな失礼な奴が王子さまなんて私は認めたくないけど世間ではそうなんだろう。まあ、それは置いておいて。

私は日本でも化粧水と乳液だけで済ませてたし、この世界に来ても化粧なんしてないから化粧の臭いがしないのは当然なんだよね。それでも髪は肩より長いし背だって160cm以上あるし、まあ東洋人が童顔なのは仕方ないけど、それを考慮したつてほぼ大人の女にしか見えないと思うんですけど?少年にはどこからどう見たって見えな・・・

「胸もないしなあ」

「・・・っ成敗

「――――」

振り上げた手は簡単にキヤッサれる。ヒヒヒヒのやわらつー。

なつ、なななんてことを言つんだ、この馬鹿男！やつぱりこいつは王子なんかじやない、馬鹿男で十分だ！失礼極まりすぎるー。

ああもうこの馬鹿男、どうしてくれようか。ぶるぶるぶる。キヤッチされた手が怒りで震える。ぶるぶるぶるぶるー。

普通は王子をまんかに手を掴まれちゃって『あやー恥ずかしいー』で赤くなるんだろうけど全くもつて違う意味で掴まれた手が赤くなる。手から腕、首、顔、足・・・体中が熱くなる。沸騰してしまいそう。今なら顔で卵焼きが焼けるぞ、握ればゆで卵ができるかも、玉子を二個持つてこーー！怒りでのぼせて茹で蛸状態、頭もぐるぐるまわって正常に働きません！

「おーおー、俺は第一王子だぞ、少しは周りを気にしりよ」「あんたが言葉を気にしろ！む、むむつ・・・むむむ胸がないことは、レディに向かつて、な、なん、たる・・・・。」

手を掴まれながらも思わず勢いでガバッと立ち上がる。あ、手伝つてもらわなくとも一人で立ち上がれるじゃない、なんて思つ余裕もなく。

困りました怒りが大きすぎてスマーズに言葉が出てきません！た、確かにね、巨乳なんかじやありませんよ、ええそうですとも巨乳じやありませんともーそれでもそれでもー。

自分もゆっくりと立ち上がりながら、ビニが呆れたよつな田で見てくれる青年。何だその田はー。

「ほひな、じゅやつすぐ感情をあらわにして怒る。だから少年の

ようだと

「さつきから少年、少年つてねえ・・・」

まだ手は掴まれている。右手は怪我で使えない。右足は痛いし、左足を使いたくとも右足で体を支えるなんて無理。手も足も使えないならば。

「こ・・・つ」

「こ?」

「これでも私は18才だし胸は日本の平均サイズだ

！

ドゴッ・・・と少しじもつた音。

馬鹿男の胸に、それはもう容赦なく渾身の頭突きをくらわしました。相手の方が背が高くて、頭に突けなかつたのが唯一残念だわ。使えるものは使う。手足がダメでも頭がある。大人の女をなめるなよ！

「あなたがまず謝れ

「・・・・・」

「・・・・・・・」

自分で女だレディだとさやんきやんわめく割に口も手癖も頭癖も悪い、とかなんとかぶつぶつ呟いている。おーい、聞こえますよ。こんなに近いんだから聞こえない方がおかしいでしょうが。・・・ん? ということは聞こえるようにわざと言つてるのか? うわ、性格悪い。もう一発くれてやろうか。そう思つたとき。

「・・・まあ、18の女に・・・見えないこともない」

ぼそつと聞こえた。

・・・こいつ。けんかを売つてゐるのか、パツと顔を上げてにらみつけると、そこには苦虫をかみつぶしたような顔があつた。・・・フオローなのか何なのか知らないが、もしかしたらこいつなりに歩み寄ろうとしているのかもしれない。全くもつてそんな風には聞こえないけど。何で俺が、つて思つてるのは丸見えだけど。王子だからなんだか知らないけど、もうちょっと人ととの接し方勉強し直したら? もう、腹立つたら。

でも・・・どうしようかなあ。まあ、確かににらみ合ひが始まつてかなりの時間が経つていて、さすがの私も、非が当然あちらにあるとはいえこれ以上にらみ合ひを続けるのは時間の無駄遣いも甚だしいと思つていたんだよね。よし、話を先に進めるためにもここは私が大人になつて、言い方との嫌そうな顔にはまあ目を瞑つてあげよう。偉いなあ、私。

「まあ、許してあげなくもないわ」

「・・・・・・・随分不遜な態度だな」

「あんたもな」

「・・・・・」

ああ言っちゃった！大人になるって決めたばかりなのに！
はあ。私のため息に青年が落としたため息が重なる。・・・お互
に、思ったことが口と顔に素直に出てしまうらしい。似たもの同士
なのかも知れないなあとどこかで思つた。もう細かいことは気にし
ないで、いい加減話を続けるのを優先しないと、本当に話が進まな
い。

「・・・それで？ 続きは？」

問いかけると青年の眉がぴくりと動き、何か言いたそうに私を見た。
あれ、私の問いかけ方が気に入らなかつたのかしら。また不遜な態
度に見えた？じゃあ、続きはどうなつたんですの、教えてください
ます？なーんて言つてほしかつたとか？・・・いやいや、それはな
い、ないない。自分でも鳥肌が立つちゃうくらい変だもの。じゃあ
何を言つてくるんだ、構えてみたけれど結局青年はそれについて何
も言及せず、話の続きを口にし始めた。・・・青年も色々と諦めた
のかもしぬれない。

「・・・この国は色を重視することが多い。黒や銀、橙や藍色、灰
色が高貴とされるんだ。だから、黒い髪を持つおまえと婚約すると
言つたところで、表だって反対されることはないはずだ。例えば・・
・そう、ジュリエッタのように、神に祝福された娘が舞い降りた、
とでも言われるかもしれないな

「・・・・・・」

「だから

「あ、え、と、ちょっと待つて」

「ごめん、話を聞いてすぐについていけない。私が馬鹿なのか、話が私の常識の範囲を越えていいのか。

さつから色、色、色って。そんなにこには色で左右される国なの？

王族にとつての結婚は、政略と同義と聞いたことがある。王族は力のある国や貴族と婚姻関係を結ぶことで、国の力をさらに膨大にしていく。それを、嫌だという個人的な感情でどうにかできるのだろうか。

私は、異世界からやつて來た。私は力なんて持つていない。私のことを一年間助けてくれたマーサたちだって、王族と釣り合つほどの権力などあるいははずもない。この青年が私と婚姻を結ぶ、なんて言つても、いくら黒髪だとはいえ権力をこれっぽっちも持つていない私なんて相手にされない気がするんだけど。そんなに色つて重要なの？権力よりも？ああ分からぬ。

「・・・例えばもし、あなたの兄弟がすごく力を持った人の娘さんと結婚したら、そつちに権力が集まっちゃつて、あなたがこの国を継げなくなっちゃつたりしないの？」

そう、さつき青年は『何事も起きなければ、次の王位の座は俺が即く』と言つていた。でも兄弟のほうが権力があるとなれば、話は変わつてくるんじゃないの？この青年と力のある兄弟とに派閥が分かれで、何か事が起きたことだつて考えられる。心配じゃないのかしら。

「そんなことどうでもいい」

「・・・え？」

「いや・・・どうでもなると言つたんだ。・・・他に聞きたいことは」

「え？ええと・・・」

なんかはぐらかされたような・・・気もするけど。

「・・・せつとき、私が日本に帰れるように協力するって言つたよね。
どうこいつ? 私、帰つちやつて良いの?」

まあ、良いなら良いんだけど。むしろだめって言われても帰るけど。
でも・・・だつて、なんか・・・。

「なんか、私のメリットの方が大きすぎない?」

だつてそりでしょ。私がこの青年の、まあ、婚約者、になつたとし
よづ。もちろん仮よ、仮。・・・私は日本に帰れる方法を青年に見
つけてもらつて、見つかり次第帰つて良いらしい。青年は確かに一
時的にお見合い話が少なくなるかもしね、だけどメリットはそ
れだけだ。私が帰る方法を手間をかけて探さなきやいけない、帰る
方法が見つかれば私はその時点で帰つてしまつから、そうすればま
たお見合い話は増えるだろ。もしかしたら、婚約者に逃げられた
と良くない噂が立つかもしない。そうすれば王位を継ぐのに悪影
響が出るんじやないのかな。・・・ううん、さつきははぐらかされ
たけど、兄弟が本当にそれなりの権力を持つ人と結婚して勢いをつ
ければ。青年はどうにでもなると言つていたけど、たとえ私が帰ら
なくたつて王位を継ぐのに何かしらの影響が出るはず。色を重要視
するらしいこの国だつて、その『色』がどの程度の位置に座してい
るかは分からぬけれど、権力を全く抜きにして物事を判断するな
んてことはしないはずだ・・・と思うんだけど。

ああ、この国の仕組みが分からないことがもどかしい。

でも、それにしたつて、私のメリット、青年のデメリットが大きす
ぎるような気がするのよ。

何か、他にも理由があるんじゃないの？何か隠してない？

「ねえ、何考えてるの」

じつと青年を見つめる。青年はしばらく黙つて見つめ返していくけれど、一つため息をついた後、ようやく口を開いた。

「頭が良いのか悪いのか・・・」

「・・・」

「・・・まあ、確かに他にも理由はあるわ。だが、ここでは言わん。言いふらさないとは思うが、出会ったばかりのおまえに対しても打ち明けるほど、俺は楽天家じゃない」

「・・・それは・・・そつかもしれないけど」

「おまえは事を簡単に考えているから、自分のメリットの方が大きいと感じるんだろう。俺の婚約者になるということはおまえが考えるよりも遙かに大変だと思うぞ。もちろん、もとの村に帰ることもできないし、色々な制約も出てくる。自由なんてまるでない。故国にいざれ帰るとしても、当然この国について勉強もしなければいけないし、周囲にそれを悟らせないためにもどの人間にも気を許すことがない。・・・それに、いくら厳重警備を強いていようと、ここは完全に安全な場所だとは言い切ることはできない。どこで盗聴されているか、どこに刺客や暗殺者が潜んでいるか分からぬ。ここはそういう場所だ。命をかけてもらひことになる」

「・・・」

「だからこそ、故国へ帰る道筋を見つけたら俺に構わず即帰つて良い。俺もまあ、他にも理由はあるが、見合い話のない一時の平安を謳歌できればとりあえずはそれでいいと思つてゐる。だから、おまえが帰つた後の俺の心配をすることはない。・・・どうだ？危険も伴つが、おまえにとつても悪いばかりの話ではないと思うが」

どうだと言われても・・・。何となくは分かつたけど、でも。

日本に帰れるかもしない、けど、よく物語とかで、王子の婚約者がいじめられたり殺されそうになつたりするけど、もしかしたらそれが実際に我が身に降りかかつたりするかも、ってことだよね。命をかけて日本に帰れる可能性にかけるか、日本に帰れるかどうか分からぬけれど、命の危険がないこの世界のどこかでのほんと過ごしていくか・・・・。

困った。今すぐになんて決められないわよ、こんな大変な選択。

「今すぐに決めなきやだめなの?」

「・・・なぜすぐに答えが出ない?おまえは故国へ帰りたくないのか?」

「帰りたい、けどーでも、命がかかってる、なーんて聞いたら考えるでしょ?よ」

帰る方法が分かつても自分の命をなくしたら帰る以前の問題です。

私の言葉に、ふむ、と考え込んだ青年。そつしてすぐに顔を上げた。

「おまえの怪我は、ジュリエッタの過失によるもの。つまり王族の責任だ。医者にも当然診せるし、怪我が完治するまで、おまえは客人として王城で過ごしてもいい」

「え」

初耳です。お医者さんに診てもうえるのは有り難いような、でも早く村に帰してほしいような。いや、本當は今すぐにでも村に帰りたいんだけど。

「もし本当に骨に異常があるとすれば、完治するまでかなりの期間を要するだらうな。・・・最低でも、一月はみたほうが良いだらう」

「・・・ひええ・・・」

鳥肌が立つた。考えられないでー。

「完治するまで待つてやる」

「・・・え?」

「医者が完治した、と判断したその日に俺に答えを寄越せ」

たつた今、最低でも一月かかるって言つてなかつた?・・・えと、別に急いでいたんじゃないの?青年はすぐに見合ひ話がなくならなくて良いの?いや、いやいやいや、早く答えを言いたいとかそういうふじやないんだけど

「早いに越したことはないが・・・確かに完治する前に婚約すれば、もし刺客が送り込まれた場合、怪我を負つおまえは逃げられないだろ?簡単に命を落としかねん」

「・・・・・うわ、確かにそうですね。引き受けた場合の話だけどね。言いたいことは分かつたわ。一応私のことを察じてくれてるつてことでしょう?優しいところもある・・・」

「せつか手間を掛けて帰す方法を探してやるんだ、それなりには役に立つてもらわないと困る」

「・・・・・」
「だから早く治せよ」
「・・・・・」

心配してくれたわけじゃないのかよ。ちつ。ちょっとだけ、ちょび一つだけ見直した私が馬鹿でしたよ。

「ちなみに・・・呪」の返事を出したときにはびつなのが?・・・

「さあな

「さあなつて……」

「ここまで俺がさらけ出してやつたんだ、その秘密を抱えてこれまで通りと同じ生活ができるとは思わない方が良いだろ？」「…………」

「なあ、王族に対しても態度もなかなか達者なお嬢さん？」

18才だもんな、意味が分からぬほど子どもじやないよなあ、と憎つたらしく嫌みも混ぜて口にする。・・・暗に、不敬罪だと罪に問うことだってできるんだってこと言つてるんでしょ。それくらい分かるわよ、馬鹿にしないで。・・・脅すなんて、なんて嫌な奴。この青年は選択肢を与えているようで与えていない。もとから否という選択肢なんてなかつたのね。取引なんて言つた口はどの口だ。にやにや笑つたその顔が憎たらしい。今すぐ刻んだ大量の玉葱をぶつかけて表情を崩してやりたい。私の人生、他人のあんたがそんな簡単に左右できると思うな。

よし、今決めた。絶対呑つて言つてやる。日本には自力で帰る。どうせ取引にのつたつて日本に帰れると決まつたわけじゃないし、もし方法が見つからなかつたら最悪、仮であつてもこの男と生涯を共にしなきゃいけないんだわ。そうよ、そうだわ、むしろその可能性の方が大きいじゃないの！こんな性悪な男とずっと一緒になんて、喧嘩ばかりの人生を送っちゃいそう。格好良くなくても良い、穏やかな人柄の旦那さんとお話しながらお茶飲んだりゆつたりのんびり手をつけないでお散歩したり、そうやってゆっくりと幸せをかみしめながら年を取つていく予定なのよ、私は。これじゃ人生計画くるいまくろもいいところよーそんなのゼーつた嫌だからね！

見てなさい、完治したその日！「あんたなんかお断りよー願い下げ！」つて部屋に絶対取れないインクか何かでかでかと書いて息ができないほど香水も振りまいて逃げ出してやるわ。私を脅したこと、

後悔すればいい。脅しに屈しない人間だつていらつてこと、分からせてやるんだから！王族だからって誰もが言つこと聞くと思わないでよね。・・・ああ、まあでも、怪我の手当でもしてくれるらしいし、一月付き合つうちにもしかしたら少しさは心を入れ替えるかもしれないし、実は良い奴だった、なんてことももしかしたらあるかもしないから、も・し・も、万が一そつだつたら、優しい私はほんのちょっとは考えてあげても良いけれど。

そつ、そつまで思つてあげたのに。なのに。やつぱり一言多いんですよ。この馬鹿男。

「ああ、俺の隣に並んで見劣りしないよつ、せめてまな板からは脱出してくれるよ？」

はい、本田！一度目、今度こそ田の前にあつた腹立つ顔面に、「ンンー」と頭突きをくじわした。

鳥の声が聞こえる。ああ、朝だ。

今何時くらいだろう。瞼を閉じていても明るく感じるから、日が昇つて結構経っているのかもしれない。こうしちゃいられない。朝ご飯に使う食材を畑に取りに行かなきゃ。でもなんだか体が重い。動かせない。どうしてかしら。

そよそよと風が頬に当たつて気持ちが良い。さわやかな朝の風。・
・あれ、でもいつもとにおいが違う・・・?

「あの、あの」

・・・・・ん?

「あの、・・・・・ん、桜さま、そ、そろそろ起きられないと」

桜、さま。ええ、確かに私の名前は桜だけれど、さまなんてつけられるくらい立派な身分なんかじゃないんですね。・・・何かおかしい。

起きて状況を確かめなきゃいけない・・・のに、なんだか起きたくない。なんだか嫌な予感がする。

ううん、でもいつまでも寝てもいられないし・・・し、仕方ない！意を決してカツと畠を開けると、畠の前には白い天井があった。うん、やっぱりおかしい。だって、私の部屋って木造立てで茶色だったもの。

視界の端で何かが動いたような気がしたのでそつと畠を向けると、これまた真白いカーテンが風に揺れていた。これも見たことがない。

「いははは？」・・・私はだあれ？なんぢやつて。ふふふと現実から

「あ、あ、桜井君、あの、あの、あの、あの、ジニー・イル王子殿下

が、「

がばーばなばばばー。

「・・・あー・・・」あん

はい、田が覚めました。やうでした。思い出しました。ここは王城。私は三日前からここにお世話をなつてます。昨日も一昨日も同じ田覚め方だった。ああもひ、そろそろ慣れないと。毎回毎回布団も落ちちゃうし。

ため息をついたところで横にふと視線を向けるとそこには、田を丸くして立ち尽くす少女。名前はミニエル。

ウーブのかかった赤い髪がとても印象的。ハの字の眉がいつも困ったような顔に見せていて、守つてあげなきゃと思わせるような雰囲気を持つ女の子。あの馬鹿王子に、ここで私の世話を任せた命されたらしき。

「おはよっ・・・あの馬鹿王子がビックリしたの?」

「え、あ、あの・・・お、おはよっ! わざこまか。殿とよつておけを頼まれまして」

「言付け?」

「ノーノ、午後二時半、お、おこでになるわつです

「・・・・・ふつさん」

その後。そう、失礼極まりない発言に対し制裁という名の頭突きをくらわした後ね。目の前の真っ赤になつた顔に、顔と権力と金があ

れば女の子は誰でもときめくと思つたら大間違いよ…と思つだけじや物足りず思わず口に出して叫んだら、あれよあれよといつ間にこの部屋に連れてこられ絨毯の上にぽーんと投げられ。「大人しくしてろ」と一言、一警して馬鹿男はすぐにして行つた。私は怒りの噴火が止まなくて、馬鹿男が出て行つた扉に向かつて近くにあつた本を思い切り投げつけて。その後、動くのも億劫だった私はふかふかの絨毯の上でふて寝したの。

そして次の日、朝起きるとなぜかベッドに横たわっていた私。体にはいつの間にか包帯が巻き付けてあって、目の前にはこの少女が泣きそうな顔で立つていた。これがミニエルとの最初の出会い。

「あ、あの、わわ、私、ミニエルと申しますー・今日から桜さまでの回りのことについてお手伝いさせていただくことになりました！ふつつか者ではありますよよよしくお願ひします・・・」

「…緊張しそぎじやないかしら。別にとつて食うわけじやないんだから。どうしてそんなに泣きそうになつて・・・つていうか本当に泣いてるし！私ってそんなにおびえるほど怖く見える！？えええ、そんなの、むしろ私の方が泣きたくなつちゃうわよ。ある意味衝撃的な出会いだつた。初対面で私何も言つてないのに泣かれるつて、ねえ。ちなみに三日たつた今も私に対するおびえはなくなつていな。聞いたところによると極度の人見知りらしく、私に対してもだけじゃないみたいなので少し安心しました。この三日で少しさは慣れたみたいだけど、緊張してどもるのは当たり前、たまに泣いちゃう世話係ミニエルとなだめる私、という構図ができるがつていてる。

最初、お世話係なんていらないと思った。確かに、このお城での生活を教えてもらつたり、「飯を運んでもらつたりはしてもらわない

と困るけど、その他、髪を梳かすにしたつて髪を結わえるにしたつて一人でできるのだし。だから、出合つてすぐに、世話してもらわなくとも大丈夫だと言いかけたの。でも言い終わらないうちにミニエルつたらぼろぼろと号泣し始めちゃつて。自分はやっぱり必要じゃないですね、モタモタしていて使えないしむしろ「迷惑」になりますものねなんて次から次へと後ろ向き発言が途切れることなく続々、そんなひどい落ち込みように聞いても見てもいられなくなつて、全身全靈をかけて励ましたり誤解を解いているうちに断るタイミングを逃し、・・・結局そのままミニエルは私のこの城でのお世話係として定着してしまつた。

でも、今となつては、ミニエルにいてもらつてとても助かつてゐる。ミニエルによれば、右足の痛みは捻挫、右腕はなんと骨にひびが入つてゐるかもしないとのこと。ひ、ひええ！道理で痛みがひどいわけよ。不思議なもので、この痛みを抱えながらあんなに走つたり高いところからジャンプしたりしていつたのに、怪我の程度を自覚すると、痛みが一気に増幅したように感じて、少しでも動かすのがすごく怖くなる。そうして今、私はほとんどベッドに貼り付け状態、一人じやほとんど身の回りのことができなくなつてゐる。ミニエルがいなかつたら私、着替えも何もできなくて、とても困つた状態だつたと思う。

ミニエルはまあ、緊張し過ぎではあるんだけど、それを除けば普通の可愛い女の子なの。お茶の入れ方がとつても上手で、ミニエルの入れるお茶は絶品。美味しいって言つたときの、恐縮しつつも少しばにかんだ顔がとても可愛い。私と同じで甘いものが好きらしく、尋ねねば城下で売られているお菓子のお話もしてくれるし。それに、自分ではモタモタして仕事ができないとか言つていたけれど、私は十分な働きっぷりだと思つ。ほら、あんな大きなカーテンもささつとまとめられる。私だつたらきっと、カーテンに遊ばれてしまうん

じやないかしら。私よりはずっと器用なのは確かだと思つたけどなあ。

そう、それでね、話を元に戻すけれど、あれから一度もあの馬鹿王子には会つていらない。私から会おうとも思わないし、あちらからもこれまで何のアクションもない。てっきり怪我が治るまで知らんぷりを決め込むのかと思つていたところだったのに。また取引の話？いや、取引じやなくて半ば脅しのよくなものだけ。

・・・ただ、一つだけ。

「・・・怪我は大丈夫かしら」

その点だけ、実はずっと氣になつっていた。血はあの後しつかり止まつたのかしら。あまりにきつく布を巻きすぎて血が流れなくなつたとか、腕の感覚がなくなつちゃつたとか、ないよね。怪我に布がくつついてないと良いけど。私の怪我みたいに、ちゃんとお医者さんに診てもらつたのよね？とかって。でも、気になるからつてそんなことで呼び出すのもあれだし、ミニエールも何も言つてこないから多分あれ以上大変なことにはならなかつたんだろうと思つていたんだけど。・・・うん、きっと大丈夫、大丈夫。

「はい？」

「ううん、何でもないわ。・・・・・?どうかした？変な顔して」「・・・・・いえ、あの、その・・・・」「・・・・・他にも何か？」「いえつ・・・・あのつ・・・・」

ああー泣きそづなミニエール。・・・ああ、びつせ、

「食つちや寝食つちや寝、豚にでもなる氣が、とでも言われたんで

しょ

「えつ、はい……いえ、あのっ」

うーん、ミニエルって良くも悪くも素直なのよね。

「そんなことだらうと思つたわ」

「も、申し訳ござりませんすみません申し訳」

「ミニエルが悪いわけじゃないでしょ？それにまあ、腹は立つナビ

確かに私も遅くまで寝てたし。『ごめんね、気を遣わせちゃって』

「いいえつ、そんな、ああ謝られないでくださいませ」

加えてミニエルは私が謝ることが苦手らしい。いつも謝らないでつて言われるんだけど、私、高い身分でも何でもないんだけどなあ。私が謝ると、なぜかすぐに泣きそうになっちゃうのよ、この子。泣かれるのは困る。女の子を泣かせるのは趣味じゃないし（男の子もだけど）、どうしていいか分からないし、何よりミニエルは泣き始めるとなかなか泣き止まない。それこそ世話は要らないこと言つた時なんて、一時間くらい泣いてたんじゃないかしら。一時間よ、一時間！ビックリよね。むしろ泣き続けるその体力がすごいと最後はもう感心するしかなかつたわ。

とりあえず泣かせるのはどうにか回避し、手伝つてもらいながら寝間着から普段用のワンピースに着替える。最初の日にはコルセットを締めて着るようなドレスが準備されていたんだけど、丁重にお断り申し上げた。着るの大変そудし、何より私にドレスなんてものが似合はずないし。そうしたら、王城で着るには簡素とも言えるようなシンプルなワンピースをミニエルが準備してくれたの。素材はシルクみたいに光沢があつてさわり心地もとても良くて、一日で上質なものと分かるような代物だから、やつぱり着る度に躊躇しちゃうんだけど。でもあのドレスよりはずつとい。

「朝食、ですが、今日はひつ・・・天気もよろしいですし、あ、あの・・・」

うん？腰のリボンを結んでもらいながら振り返ると、顔を真っ青にしたり真っ赤にしたり忙しそうに顔色をいろいろ変えながら口♪もるミニール。そんなに緊張しなくても、言いたいこと言つていいと思つんだけどな。まあ、ふふふ、そんなところも可愛いけどね。思わず胸がきゅんとしちゃう。いやだわ、女の子相手に。でも可愛いんだもん、仕方ないよね。

「そうだね、じゃあバルコニーに用意してもらえる？」

「あ、は、はいっ」

ぱっと顔を笑顔に変えて、元気に返事をしてからパタパタと朝食の準備に取りかかる。妹ってこんな感じかしら、なんて思いながらぼんやりと見ていくうちに、さすがミニール、あつといつまに朝食の準備が終わつたようだ。

できました！と珍しくどもらずに笑顔で振り向いたミニール。思わず私も笑顔になる。

「ありがとうございます、バルコニーまで手を貸してくれる？」

「はいー。」

さて、じゃあ青空の下で、優雅にブランチといきますか。

13 頭で考えるより体がつい先に動くやうなです。

「・・・良い天気ー・・・」

スコーンを片手に、バルコニーの手すりに寄りかかって空を仰ぐ。食事中にちょっとはしたないけれど。まあ、誰も見ていないし大目に見て。

ああ、なんて大きな空。

日本では都会に住んでいたから空は狭かったし、マーサの家も森の中にあつたから、ここまで広い空を見ることはかなわなかった。空が青くて雲が白いのは日本と同じ、だけどこの空は日本には続いていらないんだ。

そう思つたら、一人といつともあって、気持ちが少し沈んでしまつた。

そう、今はバルコニーに一人。

さつき、食事中に手が当たつて水を入れたポットを倒しちゃったの。それで、ミニエルはこぼれた水を拭いた後、水をつき足すので席を外している。

私がこぼしちゃったのに、悪かったなあ。

こんな怪我さえしてなかつたら、自分でちゃんと拭けたのに。あーあ。自分の役立たず具合にため息が出ちゃうわ。

ふと遠くに視線を向けると、街が見えた。

随分と大きい街。こんなに離れていても、賑わっているのが分かる。お城を降りたところにある街、あれが、城下町、というのかなあ。この国について、ほとんど何も知らないけれど、あれを見る限りきっとそれなりに大きな国なんだろうな。なんてぼんやりしていたのがいけなかつた。

「あ

ぱる、と手から食べかけのスコーンがこぼれる。

人間の反射ってすごい。何も考えてないはずなのに勝手に体が動く。目と、手と、体が無意識ながらスコーンを追う。そして。

「ひつ・・・」

我に返つたときにはもう遅い。

手すりから大きく体を乗り出したことで、バランスを崩したけれど、片手片足怪我していくて踏ん張ることもできます。

落ちる

！

ぎゅっと皿をつぶった次の瞬間、おなかに圧迫感を感じた。

「・・・一応聞いておく。落ちるのが趣味か？」

「そ・・・んなわけないでしょ」

「それは失礼。だが一度も落ちる現場を叩撃したんだ、そう思つのも仕方ないと思わないか」

「・・・好きで落ちたわけじや」

久しぶりに聞くテノールボイス。この憎たらしい言葉も懐かしい。

「・・・」自分を鳥か何かと勘違いされているようだが、残念なが

うどれほど努力をしたところで飛ぶことはできない。人間だとう

自覚を持つ方が良い」

「な

確かに一度落ちたし、また落ちそうになつたけれど、何でそこまで言われなきやいけないのよ！

むつとして、ぐいっと後ろに首を回すと、そこにむせやつぱり、予想通りの、ジョンニールの顔。

予想と違つのは、・・・全くこせつござらば、厳しい表情をしていたこと。

「後日また医者に診てもらう予定だが、腕の方はやはり骨に異常があるだろ？」「話だ。」「ニールに伝えておいたから、既に聞いただろ？」

「・・・・・」

「怪我の程度を自覚する前、自覚した後では痛みの感覚が違う上、自覚した後は無意識にその怪我を底おうとする」

「・・・・・」

「前回と同じ場所で同じように飛び降りても、骨に異常があると知つてしまつた今は、無事に着地することなどまず無理だろ？」「でも・・・いや、それはそうかもしないけど・・・」

「しかもこの下は、あの時のように刈り込んだ木もなく芝生のみ。それに、前回よりも階が高い。どうして助かると思う」「う、いや、助かるつていうか、今のはつい反射的に・・・」

「食べ物を落として反射的に手を伸ばしてバランスを崩して落ちて？それで天に召されたとなれば、とんだ笑い話だな」

腹は立つけど、確かにその通りなので言い返すことができない。確かに、確かに、その通りなんだけど、だけど。

「常に自分に周りに気を配つて過いせ」

「・・・・・・・

「（）は、以前も話したが、ただでさえ他者から命を狙われるかもしれない危険な場所だ。自分の身は最低限自分で守ろうと努力しろ。他ではどんなに間抜けでも良いが、命に関わることだけは迂闊にするな」

正論だ。そして、多分、ジエニールは私のことを察じてくれているのだと思う。多分。今度こそ。

嫌みな言葉ばかりをぶつけてくる嫌みな奴かと思っていたけれど、実はそれほど憎たらしい奴ではないのかも知れない。

・・・今更素直に言つことを聞くのはちょっと嫌だったけど、

「・・・・・分かつた」

今日は確かに私が不注意だつたから。素直に頷いた。

私が頷くのを見たジエニールは、お腹に回した手に力を入れて、ようやく私をもとの体勢に戻してくれた。

さつきまでジエニールが少しでも力を抜けば落ちてしまつような体勢だつたのよ。ああ怖かった。

改めて、手すりにつかまりながら振り向くと、相変わらず背の高いジエニールが立っていた。

何となくバツが悪いけど。でも、ジエニールがいたから助かつたんだし、素直にお礼を・・・。

ん？

あれ？

「どうしてあなたがここにいるの？」

「だって、『飯食ってるときにはいなかつたよね？えええ、不法侵入……？』

「違う」

「え、いやだつて！」

「何度もノックしたが、出でくる気配が全くない。扉に錠も下りていないし、中を見ればおまえが体勢を崩すところだった」

「…………いや、結果的には助かったんだけど……もしその時私が着替えとかしてたらまずいでしょ」

「おまえの着替えなんぞ見ても何も嬉しくもないし、何より午後に尋ねると伝言をしたはずだが」

「…………ああ」

わざと腹の立つ言葉を言われたような気がするが、自分の精神衛生上あまりよろしくないので私もわざと受け流す。
・・・そういうえば、訪問の話をミニエルに聞いた気がする。一いちらわざと耳から流していたけど。

「食卓の様子からして、ブランチか。随分と寝坊助だな」

「…………女は十分睡眠をとつて、美容に気をつけているのよ」

「まあ、そういうことにしておいてやつてもいいが。俺の妻になる前に、食つちや寝食つちや寝して豚になるなよ」

「だーかーら」

「言ひいのよ！妻にもならないし！」

ぼすっと左手でジェニールのお腹を叩く。いたた。うへ、この手応えだとほとんど脂肪がないような気がする。

面白くなくて、ぶすっと横を向くと、ひりと血が皿に入った。
黒い服の黒い袖からちりつとのぎへ皿。ああ、これってもしかして。

「…………」

「ん?なんだ」

「その、腕……」

「腕?・・・ああ、」

ジユニィルが少し袖をまくる。ドーンと、痛々しく包帯でぐるぐる巻きになつた左腕が。

手を伸ばして触ろうとしたけれど、やつぱり手を引っ込めた。

だつて、・・・・・痛みを感じたら、悪いし・・・。

「別に、こんなもの怪我のうちにも入らなこせ」

「こんなものって、だつてあんなに血がびざざむ出すたじやない」「血は止まつただろ?・・・・・ああ、一応礼を言つておけ。止血、止血、助かった」

「…………別、」

だつて私を庇つてつくれた傷だし。

ジユニィルが左手を握つたり開いたりしてみせる。奥かつた・・・。左手、ちゃんと使えるみたい。

「まだ痛い?」

「いや・・・痛みはもうないな」

自分のせいでも誰かが傷つくのは、ほのへつぱり嫌だもの。

傷が、早く完治しますよ!」^{。元通り}

と思つていたら、無意識のうちに包帯の上から触つてしまつていた。

「あ」

「・・・別に触つて悪くはないが。今も特に考えてのじじやないだろう。無意識な行動が多いな、おまえは」

—
•
•
•
•
•
•
—

いや返す言葉もないままです。

だから今までこれでやつてきて、なかなか今更直せないんですよ。

温かく？・・・いや、熱い、よつな。

「あれ・・・ねえ、熱もつてない?なんか熱いんだけど・・・」

氣のせいだろう。それがおまえが熱いんじゃないか？」

「ごめんなさい。寝てません。」

「うるさいな、お前。」

しくないが」

「あれ、顔も少し赤くない?ねえ、ちょっとおでこ触らせて」

「触らせて」

「おまじないの女だ」

「嫌だ」

「熱あるんでしょ！？」

「もう！妻にしたいんじゃないの！？妻を拒否するの！？」

「こんな時だけ自分の都合の良いようにするし！」

「事実だろう？」

「事実だけど！ ああ言えばいいの！」

「おまえもな」

「…………そろそろ失礼しても良いかな、お一人さん」「！？」

聞いたことのない第三者の声に驚いて、ついジョーナルの服を掴む。声が聞こえた扉の方をそろりと向くと、赤い髪の男性が立っていた。誰だろう。知らない人だ。

この人は・・・いい人？ それとも、悪い人？

にこやかな表情をしていて一見柔和に見えるけれど、前回のバニアスの件以来、優しそうな雰囲気の人に警戒心を抱くようになった。人間不信になってしまったようで、そのことを少し残念に思うけれど、でも誰が味方が敵かも分からぬこの世界で生きていくには仕方のないことなのかもと腹をくくった。

ジョーナルも、赤い髪も、見つめ合つたまま何も言わない。ああもう、どっちなの、いい人、悪い人？

とりあえず、視線は赤い髪から逸らさず、ジョーナルの背中に隠れてみる。

それでも、ジョーナルも赤い髪も口をきかずに見つめ合つたまま。ジョーナルを見上げると、金色の髪からちらりとのぞいた耳が少し赤みを帯びているような。

・・・やっぱ熱あるんじゃない？

そう思つて、おもむろに左手を伸ばして耳に触れ・・・よつとした、んだけど。

「・・・っぐ、くく、ふふふ・・・」

「え？」

もう一度視線を赤い髪に戻すと、お腹を押さえて笑っていた。あれ？ジヨーネイルを見上げると、赤い髪から視線を外して、今度はこちらを向いていた。呆れた表情付いで。

あれ、私なんかした？

「・・・おまえ、さつきから何してるんだ」

「え、え？」

「今何しようとした？」

「え？あ、ええと、耳が赤いからやつぱり熱があるのかなあと」

「・・・おまえは今、何かまずい雰囲気だと察したから俺の後ろに隠れたんじゃないのか」

「う、うん、そうだけど」

「・・・阿呆」

「な、何で！？」

「そんな緊迫した空気の中ビーツして俺の耳を触るっていう行動に移れるんだ。どうせ気づいたら手が伸びていた、とかそういうオチだろ？」「え？ええっと・・・」

「もつと気を配れと言つたばかりだろ？！もしあいつが敵で、俺がおまえが触った耳に注意を向けた一瞬の隙に切り込まれたらビーツするんだ」

「・・・ええっと」

「はい、今のは私が悪かったです。だつて気になつたんだもん。でもこれからは、今度こそこれからは、気をつけます。」

冷や汗を垂らしてへりりと笑つた私を見て、ジヨーネイルはこめかみを押さえてため息をついた。

それを見て、初めて心の底から申し訳なく思つて、今回ばかりはしつかりと反省しようと決めた。

「すいませんでした」

「・・・以後気をつけてくれ」

「頑張ります」

断言はできないけど、頑張ります。

その言葉に、ジェニールはまた軽くため息をついてから、未だに笑い転げている赤い髪に視線をやつた。私も倣つて赤い髪を見る。

「あの笑い上戸は？」

「・・・・・・あいつは、俺の異母弟の」

「ふつ・・・・ふ、ふふ、いや、・・・兄さん、僕が自分で自己紹介をしますよ」

ああ、やつと笑いが止まつたみたい。顔は相変わらず笑つてるけど。ジェニールも知ってる人だし、悪い人じやないみたいだけど・・・。やっぱりまだジェニールの服は離せない。

「そんなに警戒しなくても良いのに」

「・・・初対面であれだけ笑われたら警戒するんじやないか？」

いや、そういうの警戒してるんじやないけど。

でもあれだけ笑われて面白いわけもなかつたから、反論はしないで赤い髪の言葉を待つた。

「まあいいか。僕はね、兄さんの弟、つていうのは変か。この国の大第二王子、ルークセデイル。ルークスで良いよ。兄さんから見れば、僕は母親の違う弟。・・・ジュリエッタが馬で人を轡いて兄さんが助けたと聞いてはいたけれど、それがこんなに可愛らしいお嬢さんだとは思わなかつたな」

「・・・ええと・・・

弟、わん。

ジエニールを見るけれど表情に変化はない。きっと赤い髪の言つていることは嘘じやないのだな。

それじゃあ、警戒しなくても大丈夫かしら。そつとジエニールの服を握つていた手を解く。

「お嬢さんの名前を聞かせていただける?」

「え、っと・・・桜、です」

「さくら?」の辺りではあまり聞かない名だね

「あ、あの、生まれはこの国じやないから・・・」

「そう。桜、ね。可愛い名前」

「・・・・・・」

こんな言葉を面と向かつて言わたしたことなんてないから、反応に困つて視線が泳いでしまう。

そうして、はつと気がつくと、いつの間にか目の前に迫つたルーグスが、先程ジエニールの服を離した私の手を取つていた。

「それじゃあ、お近づきの印に」

赤い髪の、顔の、唇が、手の甲に。

「ひ、」

「あ」

前者は私が息を吸い込んだ音、後者はジエニールの呆けた声。

その直後。

悲鳴と共に、バチーンと気持ちの良い大きな音が、部屋に響き渡つた。

14 求婚してもヒロインティックなんじゃないの？

「だーかーらー、悪かったよ。外見から少し幼いお姫をまだなあと思つたけれど、まさかこんなにウブだとは……って、ええつ、どうしてそこで怒るの！？」

「…………」

「ええ、今僕なんかした！？あ、ああ分かつた、怒ってるんじゃなくて実は照れているんだろう？？そんなアグレッシブな照れ隠しをする君もなかなか魅力的……」

「…………」

「ごめん、多分僕が悪かった！だから、せ、皿ー皿を下ろして！」

「…………」

「兄さんもーちょつと笑つてないで止めてくださいー！」

「いや…………ははは

「はははじやなくてー！」

兄がこれなら弟もこれだ。私を何度も見れば気が済むんだこの兄弟は。

ほほに赤い紅葉を浮かび上がらせたなお口の減らない赤い髪。しかも歯が浮くような言葉ばっかり。鳥肌が立ちまくつてしまつがない。この赤髪、女たらしに違いないわ。

「ちよちよっと待つて桜姫、落ち着こいつ、落ち着こいつよ、ね！何が悪かったか分からないけどとりあえず謝るよー！」

「とりあえずって何

「い、いやとりあえずじやなくて……う、ウソつて言つたこと気が障つたのかい？それとも……」

「…………あのねえ……」

確かに男の人に不慣れだし、確かにウブで、確かに気に障ったのは事実だけど。
だけどねえ、

「私はそこまで幼くないし、初対面で了承もなしにいきなり人の手にキスなんかしないで！」

さっきのことを思い出して、もう！と勢いで皿を振り上げた。けど。パシ、と手首を掴まれた。頭上を仰ぐと、ジエニールが苦笑していった。笑い、おさまったのね。そういうえば赤髪に対する怒りで流しちやつたけど、ジエニールも人並みに声を出して笑うのね。貴重だったかもしれないのに。しっかり見ておけば良かつた。

「・・・確かに慣れないおまえに対してルーカスが先走りすぎたとは思うが、その辺にしておいてやつてくれ。弟も悪気があつたわけじゃないんだ」

「・・・・・」

まあ、悪氣があつたらさらに困るけど。

うーん・・・この世界じゃ、相手の手にキスするのなんて習慣化されたようなもののかしら。そういうばあとぎ話とかでも貴族や王子さまがお姫さまたちによくしているよね。それを考えれば、この赤髪もジエニールも一応王子をまらしげ、あのキスだつていつものことなかもしれない。

私も、そんなおとぎ話のような世界に昔は憧れていたっけ。だけど、実際に体験してみて思い描いていたものとは違うらしいと分かった。たかが手の甲にキス一つでこんなに騒ぐなと思うかもしれないけれど、でもね、手に感触だつて残るんだよ。好きでもない人の唇の感触が！

想像してみて。嫌じやない？私は・・・嫌だったの。

それでも、確かにジョン・イーリーの言ひとおりルークスは悪氣があつたわけじゃないんだろう。軽いあいさつのつもりだつたのかもしれない。

日本があつた世界の、歐米や歐州あたりで育つていれば、もしかしたら違和感を感じなかつたかもしれないけど、そんな文化のない日本でその中でも地味に育つた私には恥ずかしすぎる行為。でも・・・この世界じゃ異分子は私なんだよね。嫌でも慣れなきやいけないのは私。嫌でも理解しなきゃいけないのは・・・私。ああもう、文化が違うつてやつかいだなあ。

仕方がない。嫌だったけど、私もついビンタしちゃつたし、お互いまどいことで。お皿も元の位置に戻す。

「そ

「そう、そうそう社交辞令、あいさつだよ。今はまだ慣れないかもしないけれど、君がもつと大きくなつて、もちろん今でも十分可愛いんだけれど、もつともつと大人の素敵なレディになつたら・・・」

「

・・・またこのパターンですか。この兄にしてこの弟あり、一言多いのは遺伝なのかしら。

「18よ」

「え？」

「18ですけど。大人の素敵なレディつて、何歳からかしら？」

にいいつこり。笑つてやると、赤髪は目を見開いた後、鮮やかな髪の色とは正反対に青白く血の気が引いていった。

「18！？」

「ちょっと、人を指差さないでよ

僕と同じ年だなんて・・・！と人を指差して驚愕する赤髪。

ちょっと、そこまで驚くのもものすごく失礼だつて知つてる？私だつてあなたと同じ年だなんて心外よ。指をぱしつと払つてにらみつけると、両手を挙げて苦笑いで降参ポーズ。・・・全く。

あーあ、私つてそんなに幼く見えるのかな？日本人だから余計に童顔に見えるのだろうけど、この世界の18才に見えるにはどうすればいいんだろう。化粧するとか？？？やり方知らないけど。しかもこの世界の化粧もどういうものか知らないけど。

うーん、と上を仰いでいると、ジェニィルが口を開いた。

「・・・それで、ルークスは何の用だ？」

「え？」

「何か用があつたんじゃないのか？」

その言葉に、赤髪がパツと顔を上げる。あんなに青白かった顔色は元に戻っている。立ち直りが早いわね。

「そ、そ、そ、う、一兄さんをノワールが探してましたよ

「ノワールが？」

「はい。兄さん、病床を抜け出してきたんでしよう？珍しくノワールがこーんなに目をつり上げてそれはもう鬼の形相でカツカツと足音高らかに歩いてましたよ」

「・・・・・・・」

おや、珍しい。ヒントであるほどジニーイールを知っているわけじゃないけれど。

ジニーイールの顔から血の氣が引いていく。さつきの赤髪みたい。

ん？病床？

「…………ジョンイル」

「…………なんだ」

「…………おでこ」

「触るなよ」

「病床を抜け出したって。やっぱ熱あるんでしょ」

「ない」

「嘘」

「嘘つきー」

「ルーカスは黙つてる」

「ねえ赤髪の王子さま、この人の病状は？」

「おい」

「ルーカスだよ、桜姫。怪我のほうは血も止まって化膿もせず落ち着いているけど、熱がなかなか引かないんだ。食べるものは食べてるし、しっかり睡眠もとっているらしきけど、ずっと熱が引かない。ふらふらして本当は歩くのもやつとなはずだよ」

「ルーカス！」

「ジョンイル！」

なんでじらばつくれようとするの？

「女のおまえのほうが重傷なのに男の俺のほうが熱が長引いているなど格好がつかない」

「…………」

「なーんて馬鹿な理由で嘘ついてるわけじゃないわよね？」

「…………」

「あ・の・ねえ、いつたい誰に格好つける必要があるのよ。それに・ そんな状態でどうしてここに来たの？用事つて何？言伝じやだめなの？」

「・・・・・

じつと見つめると、ため息をついて視線をそらした。
ああまたしらばっくれよつとする気じゃ・・・。

「ちよつと・・・

「ジユニーイル殿下」

「!?

部屋の中に静かな声が響き渡った。

ひえ、また新しい人が来た! ぱぱっとジユニーイルの背中に隠れる。
そろつと扉を見ると、今度は日本でもよく見たことのある茶髪をした青年が立っていた。顔立ちは日本人とは全く違うけど。

「ジユニーイル殿下」

「・・・・・ノワール」

苦虫を噛み潰したようにジユニーイルがつぶやく。

ああ、この人がさつき会話に上ったノワールって人か。
それにもしても、ジユニーイルのこの嫌そうな顔は何だろ? ・・・ 悪い人つてこと?

「桜さま」

「へ、あ、私!?

突然振られてびっくりだよ！思わず背筋を伸ばす。

「お初にお田に掛かります、桜さま。私はノワール・スクルンティ。

ノワールと」

「ノワール・・・わま」

おやおやめジユニィルの陰から出ると、ノワールと名乗った青年の田尻が少しうるんだ。

「私は王族ではありませんから敬称をつけなくて結構ですよ」

「ええと、・・・ノワール・・・わん？」

「はい」

「あ、わ、私も王族じゃないから、さ漫なんてつけなくて・・・
「桜さまは客人としてこちらに滞在しておられますからよろしいの
ですよ」

「は、はい」

「私、ジユニィルさまの側近を務めております。どうぞお見知りお
きを」

「えと。・・・は、はい。よろしくお願ひします」

頭を下げられて、つい私もぺこりと頭を下げる。

ジユニィルも否定してないし、悪い人じゃ・・・ないんだよね？

そつとジユニィルの顔をうかがうと、まだ渋い顔をしていた。

「ジユニィイ・・・

「ジユニィル殿下。花のようにお可愛らしい姫のもとへ通いたい気
持ちは重々お察し申し上げますが、ご自分の体調も少しは考慮して
いただかないと。姫も殿下が体調が優れぬと聞いては申し訳なく思
われてせっかくの逢瀬も台無しとなりましょ」

「…………」

「…………。ああいけない。口が開きっぱなしでした。

舌がよく回りますね、ノワールさん。この国の男は赤髪といいこんな台詞を言うのが好きなんですね。ああでもジョニィルは違うかな。

そのジョニィルは、引き続いてものすゞーく嫌そうな顔をしていた。ああ、うん。分かるかも、その気持ち。わざわざからの渋い顔の意味も、なんとなく分かつたよ。

「つきましては、桜さまには大変申し訳ありませんが、ジョニィル殿下は未だ体調も優れませんので、部屋で休んでいただきたいと思うのですが……」

「え、あ、私？」

「ジョニィル殿下を大切に思われる桜さまでしたら、もちろん許可していただけますよね？」

部屋中の視線が私に集まる。

「…………ええと、はい」

あ、別に大切に思つてるとかそういうんじゃないから。雰囲気に気圧されて返事をしてしまいました。はい。

ノワールは私の返事が満足のいったものだつたようではつゝと笑う。

そして、さあ、とにかく扉の前でジョニィルを待つている。ジョニィルはどうと。

「…………」

恨めしそうに私の顔を見ながら、はあとため息をこぼし、扉に向かおうと体を翻した。

その背中を見た瞬間、つい手が伸びた。

「あ

「…………また、無意識、か？おまえそろそろ」

「ち、違つ違つ…あの、あのね、」

手が伸びたのは確かに無意識だったけど、でも聞きたいことはちやんとあるんだよ。

掴んだ裾をぎゅうぎゅうと握つて、ジョニー・イルの顔を見上げる。だけど、ジョニー・イルはまだあちらを向いたまま。私から見えるのは、ジョニー・イルの後ろ頭だけ。

「まだ……何の用か聞いてない

「…………」

熱出してゐるのに、無理して訪れた用事は何だったのか、まだ聞いてないよ。
気になるじゃない。

「…………次に訪れたときには話さう

「それは、」

「ああそうこうえば

セレジヨウヤベ、ヒカリを見た。なんだかほつとして手を離す。

今度はジョニー・イルの手が伸びて、頭に乗つかつた。ちょっと重い。手が大きいから余計に重いのかしい。

「思いの外以前通りで安心した。・・・元気なのもいいが、あまりミーハーに心労をかけるなよ」

そう言い残し、再び背を向けて茶色の青年とさつわと部屋を出て行つてしまつた。

扉は開いたまま、閉めた方がいいのかなと思つけれど、体が動かない。

だつて、ジェニィルが笑つてて、びっくりしたの。苦笑でもニヤリでもなく、普通に笑つてたんだよ。

いつも、ああいう風にしていたらしいのに。

なんだか頭が、手が触れていた部分が熱い、気がする。

・・・やっぱりジェニィル、熱高いんだわ、きつとそひ。

視線の端で何かが動いた。視線をやると、・・・ああ。

「まだいたの」

「まだいたのつて・・・それはないんじやないかい、桜姫」

「ジェニィルたちと一緒に行つたのかと」

「兄さんたちがいなくなるところばっかり見ていたじやない。明らかに、僕そこにいなかつたでしそう。つれないねえ、桜姫」

「女たらしの赤髪の王子、用事は済んだんでしょう? 出口はあちらよ、どうぞ」

「女たらしって・・・。ああ待つて、兄さんだけじゃなくて桜姫にも用事があつたんだよ」

その言葉に振り返る。私に用事? こんな女たらしが?

「私は用事なんて」

「ほら、これ」

「・・・・・

差し出されたのは、食べかけのパン。ビニカで見覚えのあるような
・・・。

思わず受け取つて、じいいと見つめてみる。

「あ

「そう、君がわつき落としたパンだしじょう?」

「そう・・・かもしれないけど。ビニして?」

確かに・・・わつき、バルニーでこれを落として私自身も落ちそうになつたんだ。

パンのことなんて頭からさっぱり抜け落ちていたけれど。
でもビニじてこれを赤髪が?

「昨日もバルニーでランチをしていたね。僕はその時も中庭にて、たまたま見上げたところに君がいた」

「・・・・・・

「遠くてはつきりとは見えなかつたけれど、愁いに沈んでいるようだつた。何を悲しんでいるんだろうと氣になつて、一晩中君のことばかり考えていた。そしてさつき、再び中庭にいたら頭上からパンが落ちてきた。何事かと見上げたら・・・一晩中思い続けた君が落ちそうになつっていた」

「・・・・・・

「それはもう驚いたんだよ。兄さんが助けていたから大丈夫だとは思つたんだけれど・・・つい、ね。気になるお姫さまにお近づきになるいいきっかけも手に入つたことだし、早速逢瀬を楽しもうと参じた次第さ。その途中でノワールに会つてさ。兄さんに用事らしかつたから、兄さんを追い出すのになつづいてと思つて。そうして僕のいらんだとおり、兄さんはノワールとともに退室し、今は姫と

僕の「一人だけ」

まあ、確かに一人だけ、ね。

あれ。・・・もしかして、ちょっとまづい状況なんじゃないだろうか、これ。

「大丈夫、無体なことはしないよ。乱暴は嫌いなんだ。・・・そう、それで、思った以上に元気なお姫さまだつたけれど、思っていた通りの可愛い姫であることには変わりない」

「・・・・・・」

「ということで、君に結婚を申し込むよ。大丈夫、一番だけれど王子だから、生活に不便は感じさせないよ。可愛いものは大好きなんだ。もしかしたら側室になっちゃうかもしねりだけど、僕から言い出したことだし大切にするよ。理由？君のことが気になつて仕方がないんだ。それじゃあだめ？結婚して自分のものになればきっと、気持ちが落ち着くんじゃないかなあつて」

堂々と馬鹿なこと言うな。どんな理由だ。そもそもそんな理由聞いて了承するお馬鹿さんがどこにいると思うんだ。そんなの、気に入る玩具が手に入らなくて落ち着かない子どもと同じでしょ。私は物じやないし、玩具じやないし、玩具のように簡単に手に入ると思ったら大間違いよ。しかも側室つて。何が何でもお断りよ。

「・・・この国の王子つて、一言田には失礼な言葉、一言田には求婚の言葉しか出でこないのかしら。赤髪に限つては口を開く度に失礼で馬鹿げた言葉しか出でこないけど」

「・・・・・それつて」

「あ」

いけない。ジョニー・イルとのあの話はまだ返事もしていないし内緒なん

だつた。

でも口に一度出でしまつた言葉は戻せない。

「ふうん、兄さんがねえ。 . . . これはまた珍しい
「あ、いや、ええと . . . 」

赤髪の細い田がさりに細くなる。

ああ困つた、どうしよう。ばれちゃつた、よね。

「それじゃあ、むしろ燃えちやうね」

「は？」

「見たところ君はまだ兄さんのものになつてないみたいだし」

「まだつて . . . 」

「僕、兄さんには負けたくないんだよね。兄さんのものはせな
いよ。ねえ、僕を選んでくれるよね」

そう言って、にこりと笑う赤髪。

私の気持ちを無視して勝手に話を進めるな。今度は兄に対するライ
バル心で私を手に入れたいって？だから馬鹿も休み休み言え。兄に
負けたくないとかそんなの私には全くこれっぽっちも関係ないから。
私はあなたの都合のいい道具なんかじゃない。

自分が選ばれると当然のように思い込んでいることが腹立たしい。
握りしめていたパンを思い切り顔面に投げつけて、空いた手で出口
を指差す。そして、まさかこんな行動に出るのは思わなかつたんだ
ろ？田を見開いて突つ立つている赤髪に向かつて、にこりと上品
に笑つてみせた。

「他を当たりなさい。帰れ」

15 混乱したら、温かい飲み物でほっとひと息。

ようやく、テラスの椅子に座る。

テーブルの上には食べかけのスコーンにハムにデザート。紅茶に口をつければ、既にぬるくなっていた。

ミニールが煎れ直すと言つてきたけれど、もつたいたいからとやんわり断つて飲み干した。

ああ、でもできれば温かいまま飲みたかったなあ。

結局、あの赤髪は私に言われたとおりに部屋を後にした。姫君の機嫌が良いとここでも出直すよ、考えといて、なんて言いながら。

もちろん、一度と来るなと赤髪が持つてきたスコーンを背に投げてやつたわ。ふん。

全く、この国の王子はろくなやつがないわよね。王様つたらどうこう教育してるとかしら。

この国の人たちは結婚をどう考えてるんだ。

結婚つて、神聖なものじゃないの？

私が幻想を抱いてるだけ？

「・・・ねえミニール」

「は、はい、桜さま」

「この国の結婚のシステムって、どうなつてるの？」

「え、ええと、あの、し、しすてむ、でござりますか？」

「ああ、システム・・・じゃなくて、うーんと、そうだなあ、この国は多夫多妻制なの？あと、男の人が優勢とかつてあるの？相手の女の人の意思つて、関係ないの？」

ジョンイルも、赤髪も、出会つてすぐに求婚、といつて良いのか分

からないけど、してきた。

でも、結婚つて、そんなに簡単にできるものなの？

まあ、日本だつて出会つて初日だろうが、結婚しようとなつて婚姻届さえ出てしまえばすぐに結婚したと見なされるわけだけど。でも、日本において、出会つてすぐにプロポーズする人なんて、そうそういないんじゃないかしら。

それがこの世界では、もしかしたら、結婚つてそんなに責任や覚悟のいるものと思われていなかもしれないよね。買い物のように手軽なものと考えられていたら。うん、そうだつたら一人の行動も納得できるわ。まあ、そつだつたらこの世界が嫌いになりそうだけど。

そんなことを思いながらミニエルの言葉を待つた。

ミニエルは、口を開けたり閉めたり、どう説明しようか一生懸命考えているみたいだつたけれど、しばらくしてようやく話始めた。

「あ、あの、私が、知つてゐる限りのことしかお話できませんが・・・。あの、平民同士の結婚は、一夫一妻制、でござります。役所へと届け出、婚姻が成り立ちます」

「日本とほとんど同じなのね。じゃあ、王族は？」

「お、王族の方々は、一夫多妻制でござります。あの、過去には、側室を一人も持たず、王妃さまお一人だけを愛された方もいらっしゃつたようですが、私の知る限り、先代、現国王さまは、側室の姫さま方とお過ごしでいらっしゃいます」

「・・・ふつと」

「その時の国王さまが承認となつて婚姻は成り立ち、その後婚儀の宴を開かれることが通例となつております。王妃さまには他国の王女さまや高位の貴族の「ご令嬢が、側室には貴族の「ご令嬢が多いですね」

「現国王は？」

「はい、ええと、国王さま、王妃さま、側室の方々は八名いらっしゃ

やこます。も、もちろん、国王さまは王妃さまはいつまでも「やこませんが、側室の方々皆さまを大変愛していらっしゃるとのお話をよくお聞き致します」

「は、ハ名ー?」

王妃さまと会わせて九人も奥さんがいるの、国王さま！
うわ、どれだけ女好きなのよ！

まあ、奥さんが多い分、もしかしたら子どもがいっぱいできて、政治にも利用できるし、跡継ぎも確実に産むことができて、国が安泰だ、なんてことかもしれないけど

どおりで、赤髪が、側室に、なんて軽々しく言えるわけだ！
確かに、他国の王女さま方がつくような正妻の座に私がつけるわけがないわね。なれて、赤髪が言つようじに側室だわ。むしろ身分的に下働きがいいところじゃないの。

思わずため息をつくと、ミニエルが慌てる様子が田の端に映った。
ああ、別にミニエルにがっくりとしたわけじゃないから。

一応フオローを入れて、ふと頭上を見上げた。

ああ、さつきと変わらず青空が広がっている。

全くどうして、こんなことになってしまったのかしら。

あの時、井戸にさえ落ちなければ。近道をしようともえ思わなければ。

でも、今更そんなことを思つてもビビりようもないのも事実。
これから何をすればいいかを考えるほうが得策だよね、と氣を取り直して。

よし、じゃあ状況を整理してみよう。解決に向かう糸口が見つかるかもしけないし。

ええと、まず、私は今怪我をしていて動けません。それがまず前提で。うわあ、最初から泣きたい。

・・・今のところ、日本に関する手がかりは一つもないのよね。

この世界にきた最初の頃こそ、落ちた場所のあたりを探したけれど、何一つ掴むことはできなかつた。

不思議だつたのが、日本語が通じること。

だって、日本にいたときだって、国変われば言葉だつて変わつたのに、この世界は日本語で話すことができる。

口の動きを見ても、違和感を感じることができない。

じゃあ、ここには日本？とか考えたこともあつたけれど、まあそれはないよね。

ああこれは考へ出すと止まらないから、ここでやめとこう。

で、マーサたちに会つて。

日本について訪ねたことはなかつたけれど、まず知らないだらうな。約一年間、私のことを見守つてくれて、この世界のことを色々と教えてくれて。

マーサたちが営む宿屋に来たお客さんにはそれとなく異世界の話を振つてみたけれど、笑い話で終わつてしまつた。

そうして、どうにかこの世界の常識を知つて、日本に帰ることを諦めるしかないと想ひ始めた時に会つたのがジョニール。

異世界の話をしたら、いきなり求婚してきて。求婚を受けるなら、日本について、書物や落ちた土地に赴いて調査すると言つてくれた。まあ、もちろんそこに愛はないくて。本人も言つていたけれど、契約、なんだろう。ただ私が他者に狙われるかもしれないっていうリスク付きらしきけど。

あと、赤髪。

まあ、多分この世界では珍しいらしい黒髪の私が少し気になつて、あと兄に負けたくないライバル心で求婚してきた、ジョニールよりも馬鹿な男。気になつて、つていうのも、気になる玩具が全部欲しこうといつ子どもと同じものなんだろう。ああ、なんて幼い。

とつあえず、日本に帰る可能性が一パーセントもあるのは、ジョ

「イルなんだよね。それは、間違いない。間違つても赤髪はない。絶対ない。

ただ、やっぱり気は進まない。当たり前でしょ？知らない人と結婚なんてしたくない。

ジニー・イルと結婚という名の契約を交わして、もし日本に帰れたとして、好き合う相手が見つかって、結婚するとなつても、日本では一応初婚だけど、私の心の中の履歴書では再婚になつちゃうわけよ！嫌だ！

だからといって、私も、ジニー・イルもだけど、一生添い遂げる気は、全くないし。

それに、ジニー・イルの案に乗ると、命をかけるといふリスクがつく。何か護身術でも習つてれば良かつたけれど、今更言つてもどうしようもない。

何一つ身を守る術のない私は、きっと刺客なんものが来たらイチコロだ。

それほどのものかけて、日本に帰りたいのかなあ、私は友だちもいる、思い出もいっぱいある、それでも、日本に帰るために命を落としたら、後悔しないと言い切れる？

「…………わからんない」

わからんないよ、そんなこと。

だって、この世界だって、好きになってきたし。

今はちょっと違うけど、マーサのところにいたときには、自然に囲まれて、とても穏やかな気持ちで過ごせて、幸せだった。このまま、マーサの宿屋で働いていたいと思うほどだ。

この王城内だとどうも落ち着かないけど、だけもしかしたら、平民の中に紛れれば、この世界の常識を身につけた今、友だちや、ちゃんと好きになれる伴侶を見つけられるかもしないし。

「・・・あ

そうだ、無理だ。私、黒髪だった。黒髪って、なんか、特別だとか
言つてた気がする。
じゃあ、穏やかな生活は望めない？それなら、染めればいいか。い
や、結婚してずっと一緒に生活していたら染めてることすがに
ばれるか・・・。そもそも、この世界つて髪染めるつていう習慣が
あるの？

そこまで考えて、また一つため息。

やつぱり、王城から降りていっても、休息の地は見つけられるとほ
限らないらしい。

いつそ坊主になるか。嫌だ。まだ18歳の乙女なんだから。

コポコポ、と音がして、その方を見てみると、ミーハルが新しく紅
茶を注いでくれていた。

にこにこと差し出されたカップを受け取つて、一口呑むと、紅茶の
良いにおいが口の中に広がつた。

ああ、落ち着く。

行つては戻り、行つては戻りで、頭の中が混乱して少し疲れてきて
いた。

少し落ち着く。

ありがとう、ミーハル。

ほかほかと体も温かくなつてきて、ビレからかしみ上げる安心感に、
目を閉じた。

『全く、あんた一体どこのまで行つてきたのよー。方向音痴も度が過ぎるわー!』

(涙をためながら勢いよく抱きつく美和。黙つていなくなつて「ごめんね、ごめんね。ちょっと異世界行つてたわ、なんて言つたら頭を小突かれた)

『おまえが休んでる間、ノート全部とつといたぜ。後でアイスおこれよ』

(隣の席の秀くん。いつもと変わらない笑顔で、ノートを差し出してくる。うわあ、ノート五冊つて、すごいねえ。受け取つてぱらぱらめくつたら、パラパラ漫画が書いてあつた。芸細かいなあ)

『無事だつたか!』

(美和と同じように、涙を一杯ためて、仁王立ちする先生。ああ、あの強面の先生が、こんなに私の帰還を喜んでくれるなんて。思わず私も涙がこみ上げてきた)

『まあまあ、桜ちゃん!どこに行つてたの、心配したのよー。』

(近所のおばさん。おばさんの声を聞いて、足腰の弱いおばあさんまで家から飛んで出てきた。ああ、お久しぶりです。大丈夫、どこも怪我してないです。ありがとう)

『・・・・・』

(この家の変わらない。むしろ、このほうが家に帰つてきた実感が湧いてしまうのは、悲しいけれども事実。久しぶりだ、この空気。ああ、寒い)

『わん!わん!わん!』

(愛犬のハーディーが勢いよく駆け寄つてきた。ああ、そんなにしたら、引っ張られて首がしまつちゃうでしょ。なでてあげると、落

ち着きなくお腹を見せたり、起き上がったりと繰り返して。あ、
パーティーも私が帰ってきて嬉しく思ってくれるのね）

ああ、やつぱり、日本に帰りたいな。
そつと、そう思った。

16 乙女だって愛だの恋だのばかりじゃないんです。

「ミー・エル、紅茶のおかわりをお願い」
「あつ、は、はい！」
「あ、僕も僕も、紅茶と、あとそのスコーンも一個どうで」
「あ、あ、あの、は、」
「無視していいから、さ、紅茶をお願い」
「え、あああ、あの・・・」
「もう、姫つたらいじわるなんだから。ああ、もしかして焼き餅？」
心配しなくても大丈夫だよ、確かにミー・エルも可愛いけれど、今の
僕の目にはもう君しか」
「ミー・エル紅茶はやっぱりいいからその熱湯をちゅうだい」
「え、え、あつ、あの」
「ははは、照れ屋さんなんだから。そんなどこにも可愛によ」
「ミー・エル、早く熱湯とあとナイフとナイフとナイフとフォークと

皿

ミー・エルがあらあらしながら私とナイフとお湯と赤髪をぐるぐる交
互に見てくる。
「ごめんねミー・エル、あなたを困らせたいわけじゃないの。
ただ早くこの馬鹿王子を滅したいだけ。

「声に出でるよ、桜姫」
「あら！」めんなさい、私つたら正直だから」
ははは。ほほほ。と一人で笑い合つ。
その様子を、ミー・エルがやっぱりおおむろしおがら見ていく。

「あのね、私は出て行けと言つたはずよ」

「それは昨日の話でしょ？ 昨日はひやーんと訴われたとおり出でつたよ」

「私は昨日からずっとのつもりで言つたんだけど」

「残念、声に出さなきゃ伝わらなこともありますんだよ、桜姫。 といふことでそれは却下ね」

ああ言えぱいづかづか。 やつぱりこの人、ジョン・エイルと兄弟だ。

今朝は昨日よりいくらか早く起きて、身支度も調べて、ブランチじやなくてしつかり朝食をとつた。その後、特にすることもないし動けもしないのでベッドに座つたままずつとミニ・エールとおしゃべりして。そうして、お昼の時間になつてミニ・エールが準備を始め、私もリハビリをかねてベッドに手をついて伝い歩きをしていたとき。

『おはよう桜姫！ 今日も「機嫌麗しゅう」。』
『・・・・・』

扉をドバーンと勢いよく開き、それはもうつるさい人が私の穩やかな日常に割り込んできたのです。

驚きと緊張のあまり拳動不審になつたミニ・エールをどうにかなだめ、私も手伝つて準備を終わらせ、ようやく席について食事を始めたところなの。

え、赤髪王子？ もちろん無視よ。徹底的に無視。

でも赤髪王子も負けてはいない。

どこからか椅子を持つてきて私の隣に陣取り、昼食を取り始めた。私のスコーンや紅茶やハムを勝手にね。

しかも、全く相手しなくてもずつとしゃべり続けていたのはこちらとしては無視していればよかつたけど、今度は勝手に私の髪に触つたりミニ・エールのHプロンのひもをほどいたりちょっかいかけてきて（酔っぱらつたおじさんじゃないんだから！）、相手せざるを得ない

くなつて……
今に至るのです。もう一

「出て行つてよ」

「どうして？」

「どうしてつて……だつてこれ、私のお匂い飯だもの」
「女の子が一人で食べきれる量じゃないと思つけど」

「たつ・・・・食べられるわよ！」

「まあ、いいけどね。じゃあ僕も自分の分持つたら匂食に混ぜ
てもらえる？」

「そういう問題じやないわ

「じゃあ何が問題なの？」

「何が問題つて・・・・」

「うん」

「な、何が問題つて・・・・・・」

あれ。何が問題なんだろ？
いや、いやいや。

「私の部屋ー借りているけどーこれは私の部屋ー勝手に入つてこない
でーお匂も一緒に食べること、いいわよって言つてない！」

「でもここは王城だよ。いわゆる僕の家。だから、この部屋も僕が
入つても何もおかしくないでしょ？」

「でつ・・・でも、客室には普通勝手に入らないわ

「じゃあ僕が普通じやないんだろ？ね」

「・・・あのねえ！」

だからああ聞えぱいひつぱいひつんだからー

「だいたい、だいたいねえ、何でここに来るの？自分の部屋でも素

敵なお姫様の部屋にでも行つて食べればいいじゃない！」

「やだなあ、だから素敵なお姫様の部屋に来てるんじゃない」

「私じゃなくて！」

「だつて君のこと気になるんだもの。それが理由じゃダメ？」
「…………ひ」

くちづとした茶色い瞳を細めて笑う赤髪王子。

だからね、そういうこと面と向かつて言われたことなんてほとんどないから、そんな風に言われると困るんだつてば。思わずうつむいて視線をそらす。

女好きとライバル心の強いことからのただのナンパだと分かつても、対処できない私。だつて慣れてないんだものー笑つて流せるほど経験もないし、大人の女でもないし。

何か言わなきゃと思つけど、何を言えばいいのか分からぬ。

こつこつとき、女の子つてどう対応するんだろう。
ちらと赤髪王子を見ると、テーブルに肘をついてここにこ笑つていた。

くそ、余裕だ。

王子なんだから、きっといろんな女の子と仲良くなってきたんだろう。

私みたいにウブな女の子だつて、きっとたくさんいたはず。お手の物だつたりするんじゃないの。見るからにこの王子、女好きっぽいし。

まあ、でも王子なんてそんなものかしらね。

・・・ああ、でも。

ジェニィルは女に興味がないって自分で言つてたつけ。化粧も振る舞い方も嫌い。たぬきに見えるとかつて、まさに女の私に向かつて言つて、それで私を怒らせたんだつた。

まだあれから数日しか経つてないのに、ずいぶん前のことのような気がする。

昨日、ノワールっていう人に連れられて出て行つたジエニィル。結局おでこは触れなかつたけれど。

体、熱かつたなあ。

歩くのも大変つていうくらい高熱だとか言われていたし。

「ね、ジエニィルは？」

「・・・桜姫、僕の話聞いてた？」

「いいえ、全然。ねえ、ジエニィルは？ 部屋？ 熱は下がつたの？」

「・・・それを聞いてどうするの？」

「え？ ええと・・・」

聞いてどうするって、そりやあ。

「部屋で伏せつていいのなら、お見舞いに行けないかしづ」

だって、熱が出ているのは私をかばつたからだもの。気になるじゃない。

お見舞いつていつても、私はこんな身だから、フルーツも何も、持つて行くお見舞いの品なんてないけれどね。

あ、でも庭に出れば花を手に入れることができるかしり。そんなことを考えながら、ふと意識を赤髪王子に戻すと、面白くなさそうな顔をしていた。

何よその顔。

「何よ」

「別にー」

「ちょっと、何か言いたいことがあるなりまつせつと

「桜姫も、兄さんがいいの？」

「は？」

いきなり何言つてゐる、この人。

「何の話よ」

「だから、僕より兄さんがいいの？」

「・・・はあ？いいのつて何よ、そんなこと、」

「だつて、僕が一生懸命君に振り向いてもらおうと頑張つているのに。話を静かに聞いてくれてゐるのかと思えば、口にするのは兄さんのこと」

「それは・・・」

「兄さんと一緒にるのは、僕はオススメできないよ。兄さんのところに嫁いだ場合、正妻だろうが側室だろうが、必ず刺客はやつてくる。それでも、命をかけてまで、兄さんと一緒にいたいの？」

「・・・・・・・」

別に一緒にいたいとは思つていないわよ、と言い返そうとしたけれど、思いがけず赤髪が真剣な顔をしていたので、口をつぐんだ。

「僕は、父上のように、側室だつて一人一人しつかり愛せる自信がある。でも兄さんは、僕のように器用じゃない。君は、幸せにはなれないよ」

そんなこと。

まだ、ジェニールの提案を受ける、と決めたわけじゃない。それでも、そう決めかけていたところで向けられたその言葉は、ちくりと心に痛みをもたらした。

私は、ジェニールと夫婦円満のような幸せ生活を送りたいわけじゃない。

私は、日本に帰りたくて、だからジェニールの提案に気持ちが傾いているだけ。

だから、別にジェニールが私のことをどう思つてによつと、日本に

帰るまでどんな生活を送りたい関係ない。最終的に日本に帰ることができるばそれでいい。

そう思つてこた。つづく、今でもそう思つてる。・・・でも。

「ねえ、僕なら、君を幸せにできるよ

あ、なんて甘い言葉。これが、兄に対するライバル心から生まれたものであつたとしても、今の不安定な私には魅力的な言葉に聞こえる。

・・・でも、私はその言葉に飛びつくとなんかできない。

「ねえ、あなたの言ひ寄せは、何?」

「え?」

「あなたの言ひ寄せは、せつと今のお下りとつての幸せと同意義じゃないと思うわ

「・・・・・」

「私の今の幸せは、結婚して相手に愛された生活を送る」となんかじゃない。私が今欲している幸せは・・・」

日本に、帰ること。それ以上でもそれ以下でもない。そう、自分に言い聞かせるように頭の中で言葉にして繰り返し、動揺してしまった心を落ち着かせる。

「・・・君の幸せは何?」

「・・・教えないわ。言つたとしても、あなたには叶えられない

「こじわるだなあ」

「こじわるで結構よ

そつ返すと、む、と口をへの字に曲げた。

「・・・僕の知ってる姫君たちは、愛される」ことが女の幸せだと言つていたよ。君だって、女性だろ?」

「女って一括りにされても困るわ。一人一人、価値観が違つて当然でしょ? 幸せって一言で言つたって、いろんな幸せがあると思わない?」

「・・・それはそうかもしれないけど・・・」

赤髪の眉間にしわが寄る。

だつてしうがないじゃない。本当のことなんだから。

「・・・でも、そうね、愛されて嬉しいと思わないわけでもないけれど」

そう言つと、赤髪はうつむき加減だつた顔をパッと上げた。

「じゃあ、僕が」

「有り難い申し出だけど。私、愛して欲しい人には自分からちゃんと言つわ。でもそれは、あなたじゃない」

「・・・・・・」

「私は、私が好きになつた人、私のことを理解したその上で好きになつてくれた人と結婚できればいいなと思つてゐる。私は、あなたのことは好きじゃない。あなたも、気になつてると言つてはいたけど、正直、好きの境地まではいつてないでしょ?」

たとえもし、この世界で成り行きで結婚という形をとらなければいけないことになつたとしても、それはあくまで「契約」。

結婚するなら、それは赤髪の言つようこそ、ちゃんと愛してくれる人と。

もちろん、それは日本での話。ここでは、その「幸せ」は求められない。

だから。

「私は、あなたとは結婚しない」

「わざわざつと告げると、赤髪は苦笑した。

「僕は諦めなによ」

「なつ」

「だつてね、君と話しているの、すぐ樂しいんだよ。もちろん、他の姫君と話してくるときも樂しげけれど」

「・・・結局他の姫君と同じじつことじやない」

「違う違う、なんて言ひのかなあ、昔から気が知れてるよひな気安さがあつて、気が楽、とこうか」

「・・・・まあ、お姫さまじやないから、美辞麗句を述べなくともいいしね」

「どうしてそう捉えるかなあ。美辞麗句って、違うよ、君の素敵なりじゆをそのまま言つていいだけなんだけどなあ」

「・・・・」

「あれ、照れてる? 可愛いねえ」

「つ、つむやこーー！」

「もう一口が減らないんだからーー！」

「ねえ、桜姫」

「・・・何よ」

「確かに、僕は王座に比較的近いところだから、立場的に正妻はきっと他国の王女さまになるんだろうと思つ。でもね、側室であつても、愛情はいっぱい注ぐつもりだよ」

「・・・・・」

「君の言つよひ、恋愛感情としての好き、とはまだなつてないと

思う。だけど、これから君のことをたくさん知つていけば、好きになる確率は十分にあると思わない？」

「・・・・・」

「もう一度言つよ。僕は、君を諦めないから。君の考える幸せは、僕には分からぬけれど。でもそれもひつくるめて、きっと、僕と一緒にいれば君が思う以上に、望む以上に幸せになれる。幸せにする約束するよ」

この赤髪は、もしかしたら本気なのかもしれない。いや、どうかしら。分からぬけど。断定はできないけど。

だけど、赤髪が自分で言うとおり、他の側室になる姫君たちのこともきっと本気で好きになつて、妻となつた人みんなに愛情を注ぐような気もする。

赤髪の言つ「幸せ」も分かる。いつかは、私も望んでその「幸せ」を手に入れたいと思う。でもね、私は今、その幸せは望んでいないんだつてば。

私は、日本に帰りたいだけ。それがまず前提で、あなたと結婚という形をとつたところで日本に帰れるわけでもなし、私には何のメリットもないのよ。

それに、もちろん結婚なんてしないけれど、側室なんてものになつた自分を想像したくもない。いくら愛情を注いでくれたところで、側室なんかじゃ二股や三股をかけられているのと一緒に思えてしまう。側室にとの求婚なんて、二股の申し込みのように聞こえちゃうわ。だって仕方ないじゃない。私、この世界の住人でもなくて、昔の人でもなくて、頭の中は21世紀の日本の常識でできる現代っ子女子高生だもん。

この赤髪は特に深く考へることもなく側室つていう言葉を口にしてるんだろうけど、その時点で私たちの常識も価値観も違うのよね。他のことはまだしも、その側室なんていうものに違和感を感じない

常識に、私は漫かりたくないと思ひ。

あなたとは結婚はできない。メリット、気持ち、他にも色々なことをひつくるめながらじんに考え方を巡らせたといひで、その答えしか出てこない。

だけど、もう一度私もそのことを告げるときは、どうしてができるなかつた。

「馬鹿ね」

人の事情も知らないで、拒まれても諦めずに、「幸せにする」だなんて。

でも、その言葉自体は、きっと女の子なら一度は夢見るプロポーズの言葉のようだ。

ここが異世界じゃなくて、日本で普通に生活していたら、つっかりときめいていたかもしれないわ、・・・なんてね。

その言葉を、もちろん受け入れはしない。受け入れられない。でもまあ、気持ちは嬉しいし、その思いを受け止めることくらいはできるかなあと思う。

赤髪はとこうと、変わらず黙つてこちらを見つめている。

向ける言葉を思いつかずに、ついまた、馬鹿とつぶやくと、男は恋に関わると馬鹿になるんだよ、と目を細めてくしゃりと笑った。ああ、その笑い方は悪くない。それまでの張り付けたような笑顔よりも、ずっといい。

そう思つて声に出して云ふると、少し驚いて、今度は困つたようこ笑う。

人間つて、色々な笑い方ができるんだわ、とほんやりと思つてゐるど、赤髪がおもむろに立ち上がつた。

「兄さんは、まだ少し熱があるよ。怪我の方はそんなにひどくないらしいけど、日頃の政務の疲れがきつと出たんだと思う」「え・・・」

「ただ、体がなまるとか言って、何度もベッドを抜け出そうとして侍女やノワールに止められてた。侍女がベッドに張り付いてたよ。まあ、兄さんの気持ちも分かるけれど」

「・・・・・・・」

「お見舞い、きつと喜ぶよ。行つてあげて」

話が突然切り替わったことについていけずに、赤髪をただ黙つて見つめていると、じゃあ姫君、また来るよ、と言い残して私に背を向けた。

登場に比べ、あまりにもあつさつしそぎで、拍子が抜けてしまつ。いきなりどうしたのよ。

「ちょ、ちょっと!」

「ん?・・・・ああ、兄さんと君とのことは誰にも言つてないし、言わないから大丈夫。誰かに知られて、大事な君の命が狙われたら嫌だしね」

「え、ああ・・・・うん。いや、そつじやなくて・・・・」

「じゃあ、何?」

「ええと、・・・・・あ、あの・・・・あの、ありがとう!」

「・・・・何が?」

「あ、ええと・・・」

立ち上がつたとき同様、ゆつくりと振り返る。不思議そうに首をかしげてこちらを見る赤髪。

笑顔は変わらないけど、でもどこかそれまでと違うような違和感を覚える。それに少し戸惑いながら、続きを口にした。

「ジニー・イルの」と教えてくれて、あと……あの、し、幸、せ、に、する、とか、言つて、くれて……」

「…………」

「ふ、ふざけていたのかもしれないけど、でも、あの、一応これでも女の子ですからね、……嬉しかった、わ」

ああこんなことを言つなんて恥ずかしい。何でこんなこと言ひちゃつてるの、私。

で、でも実際、ジニー・イルのことも教えてくれたわけだし。根っからの悪こやつじゃなく、よつに思ひへじ。

なんて自身に、言い訳にもなつていらない言い訳をしながら話した。

知らずつむいていた顔をそろつと上げると、赤髪はまた少し驚いた様子でいて（まあ、それまでの私のことを考えれば、こんなこと言つなんて吃驚するかもしれないわね。私自身も吃驚だし）、だけれどすぐに笑顔を返してきた。

「ふざけてなんかない。それに、これでも一応、なんかじゃないよ。桜姫は、すごく素敵な姫君だ。この僕が求婚するくらいなんだから」

「…………」

「次に遊びに来たときには、ルークス、って呼んでくれると嬉しいな。それじゃあ、またね、姫君」

そう言い残して、今度ここの部屋を後にした。

「…………あの、桜、さま？」

「…………あ、うん」

それまでしばらく見つめていたドアから視線をはがし、食べかけのスープを手にとつて、口に詰め込んで、紅茶で流し入れて。

「//| | -エル」

「は、はーー」

思わず氣をつけの姿勢をとい//| | -エルにむづつと笑つてから、クローゼットを指差した。

「お庭とお見舞いに行きたいの。服を、ひとつてくれる?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541t/>

薔薇と桜と王子さま

2011年10月10日12時06分発行